

日本占領下インドネシアで読まれた刊行物

—知識人とその他に分断された社会を映し出した鏡—

姫本由美子[†]

Publications Read by the Indonesians during the Japanese Occupation in Indonesia:

A Mirror of the Culturally Divided Society, the Literate and the Illiterate

Yumiko Himemoto

This paper aims to examine publications, which were read by the Indonesian people during the Japanese occupation (1942–1945) mainly in Java, Indonesia in relation to Japanese ruling policies for Java.

First, the publications in *Catalogue of Publications during the Japanese Occupation*, which was compiled and published by the Indonesian National Library in 1983, were classified into 4 categories based on publishers, i.e. Japanese Military High Command in Java and its bureaus, Balai Pustaka established by the Dutch Colonial Government, newspaper companies, and private publishers. Second, the publications of each category were further analysed by writer, language and method of dissemination.

It was revealed that all the publications were under surveillance of the Japanese army, but the Japanese army also had to change their policies in response to the culturally divided society. Furthermore, some publications in the fields of humanities including literature remind us of the necessity to explore why those publication were possible to come out during the Japanese occupation from various perspectives in the future.

はじめに

第1次世界大戦以降、戦争には軍事力だけではなく、政治・経済・思想などの分野の重要性も認識されるようになり、「総力戦」という言葉が使われるようになった。日本も日中戦争における抗日活動への対処に苦慮することとなり、資源獲得を目的として南方へ侵攻・占領するにあたって、宣伝班を組織して南方地域の人々に対する宣撫工作を行った。そこで掲げたスローガンは、英米からアジアを解放し、日本を中心とした「大東亜共栄圏」を建設することであった。

1942年1月から3月にかけてオランダの植民地であったインドネシアを占領した日本軍は、当初の軍事作戦上の都合から同領域を3分割し、ジャワ（マドゥラを含む）を陸軍第16軍が、スマトラを陸軍第25軍が、そしてオランダ領のボルネオ、セレベス（スラウェシ）、バリ以東の地域を海軍が統治した。オランダ植民地時代の政治の中心であったジャワでは、陸軍第16軍の司令部直属の宣伝班が、様々なコミュニケーション手段、例えば新聞、ポスター、ラジオやニュース映画、演説や演劇

[†] 早稲田大学アジア太平洋研究センター 特別センター員

を用いて宣伝活動を行った。また、教育による対インドネシア人教化も広義の意味で宣伝活動と捉えることができる。当時識字率が6パーセント程度であったジャワでは、他のメディアと比較して、活字を中心とした出版物が思想・信条の伝達や意思疎通のコミュニケーション手段として、あるいは日本占領軍の政策の周知や民衆動員のための宣伝手段として、当時の社会に及ぼした影響を過大評価することは禁物であろう。それよりも、写真を多用したグラフ誌や映画、そしてラジオや音楽のような視覚や聴覚に訴える宣伝手段が効果的であった。

しかし、宣伝手段の一つである刊行物、特に学校用教科書を含めた図書は、次の観点から日本占領期のものについても考察する意義があろう。すなわち、刊行物は、その出版言語を固定化するだけでなく、そこに記された内容を固定化し、次世代へと読み継がれていく潜在力を備えている。そこに書かれた内容については、戦時・占領下のインドネシアにおいて表現の自由は検閲等によって厳しく制限されたことは考慮されなければならない。しかし、インドネシアの人々は、オランダ植民地時代に検閲を通り抜けるために自己検閲や隠喩を用いる術を身につけていた。さらに日本側も、出版活動にかかわった宣伝班等に所属した人々の中には、日本軍政に対して批判的な人々も存在し、一律に彼らの行動を捉えることはできない¹。したがって、日本占領期の刊行物が単に日本の宣伝メディアであったと捉えるよりも、日本占領期にオランダ植民地時代には不可能であったどのような内容が表現可能となり、さらにインドネシア独立後に、その中の何がそのまま、あるいは一部を改訂されて刊行されたのかを検討することによって、当時のインドネシア人の考えを知ることのできる貴重な資料と捉えることができる。

したがって、日本占領期インドネシアに流通した刊行物について、日本軍政の方針の下に、誰が出版元となり、その書き手は誰であり、さらにそれらの刊行物はどのように流通し、誰によって読まれ、それがどのような影響を長期的にインドネシア社会に与えたのかを考察することは意義があると考えられる。

これまでの既存研究では、日本占領期の刊行物を単に日本のプロパガンダの道具とのみ捉え、日本の統治政策、そしてその宣伝方法を知ることが目的として新聞、雑誌、図書等が分析されてきた。しかし筆者は、書き手の多くがインドネシア人で占められている新聞や図書について、それが単なる日本の宣伝としての機能を果たしていたのではなく、インドネシア人の主体的なかかわりや主張が盛り込まれていたのではないかと推測する。

また日本軍政は、オランダ語を禁止し、日本語と並行してインドネシア語を公用語としたことによって、言語・文化的にはインドネシアを統合することを促進した、と既存の研究では考察されている²。しかし、3年半の短期間であった日本占領期には「国民的出版語」とされたはずのインドネシア語以外の言語を用いて刊行された出版物も少なくない。刊行物の言語は当時どのように使い分けられていたのか、その背景を知ることが、当時のインドネシア社会においてインドネシア語で書くことの意味を再考することにつながる。

そこで、日本占領期にインドネシア人によって読まれた刊行物がすべて保存されていない現状にお

¹ 当時の日本の精神状況を知るためには、次を参照。鶴見俊輔. 1982. 『戦時期日本の精神史—1931～1945年—』岩波書店。

² カナヘレ, ジョージ S. 1977. 『日本軍政とインドネシア独立』(後藤乾一, 近藤正臣, 白石愛子訳), 鳳出版, pp. 347-348. また, B. アンダーソンの『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行 (増補版)』では, ナショナリズムの生成を促す重要な要素として, 「出版資本主義」と並行して「国民的出版語」をあげた(アンダーソン, ベネディクト. 1997. 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行 (増補版)』白石隆・白石さや訳, リプロポート, NTT 出版, pp. 82-86.)。

いてそれらを分析対象とする限界を認識しつつも、それらがインドネシア社会に対して持った意義を検討したい。本稿では、手始めに、日本占領期にインドネシア人によって読まれた刊行物の全体像を明らかにし、今後の研究を進めるための基礎としたい。

第1章では、日本占領期の刊行物の全体像を把握するために依拠した1983年にインドネシア国立図書館が編纂・刊行した『日本占領期のインドネシアにおける刊行物目録 (*Katalog Terbitan Selama Pendudukan Jepang di Indonesia*)』(以下、『インドネシア国立図書館目録』と表記)の編纂を可能にした背景を明らかにし、あわせて同目録の限界についても言及する。その上で、同目録に掲載された刊行物の出版元の特徴を年代別に明らかにする。

第2章では、ジャワの軍政監部とその関連機関の刊行物を、官報等、初等・中等・高等学校用教科書、および研究所等の報告書・機関誌に分類して、日本側の政策との関連でそれらが刊行された背景を明らかにする。また、その書き手や流通について分析する。第3章ではオランダの植民地政府が設立したバライ・プスタカ (*Balai Pustaka*) の刊行物を取り上げ、オランダ植民地時代と比較することによって、同様の分析を行った。第4章では新聞を中心とした新聞社の刊行物について、そして第5章では私立学校も含めた民間出版社の刊行物と、日本から送られた刊行物、およびオランダ植民地時代に収集され日本占領期にも閲覧することができた刊行物を扱った。結語では、以上の分析結果をまとめて、日本占領期の刊行物を今後研究するにあたって取り組むべき課題を明らかにした。

なお、オランダ植民地時代は「マレー語」と表記されていたものが、1928年の「青年の誓い」以降、そして日本占領期に「インドネシア語」と徐々に表記されるようになった。本稿では、その呼称が混在していた状況を理解するため、できるだけ当時の表記の仕方に合わせ、どちらかに表記を統一することはしなかった。また、「オランダ領東インド」もオランダ植民地時代についてはそのままの呼称を用い、「インドネシア」として表現を統一することも避けた。

1. 日本占領期の刊行物—『インドネシア国立図書館目録』を手掛かりに—

日本が占領したインドネシアにおいて陸軍第16軍の管轄地であったジャワでは、1942年3月5日以降にジャワで印刷された刊行物は日本軍政監部宣伝班報道課に献納しなければならないことと定められた³。献納された刊行物は最終的に、現在の国立博物館に付属していた図書館、すなわち現在のインドネシア国立図書館で保管された。ジャカルタ以外のバンドンやジョクジャカルタ等の地方の刊行物も郵便システムを利用して送付しなければならなかった⁴。オランダ植民地時代にも、東インドで刊行された書籍等をバタヴィア学芸協会 (*Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*) に献本することが政府によって義務付けられていたため、それに倣ったと言える。

オランダ植民地時代には、この制度によってバタヴィア学芸協会へ献納された刊行物を含めて、同協会傘下の博物館付属図書館は50万冊におよぶ蔵書を所有していた⁵。そこに、日本占領期にジャワで刊行された書籍、新聞等が追加されたことになる。同制度によって同館が所蔵することとなった日

³ *Kan Po*, No. 12, Boelan 2-2603 [皇紀] (1943), pp. 11-12.

⁴ *Kan Po*, No. 13, Boelan 2-2603 [皇紀] (1943), p. 9, p. 24.

⁵ 別枝篤彦. 1991. 「南方文化の研究にたずさわって」(インドネシア日本占領期史料フォーラム『証言集 日本軍政下のインドネシア』龍溪書舎, p. 367.)

本占領期の刊行物目録が、インドネシア国立図書館によって 1983 年に編纂され刊行された。編纂にあたっては、アメリカのコネル大学のアジア研究学科東南アジアプログラムの現代インドネシアプロジェクト (Modern Indonesia Project) の一環としてジョン M. エコルス (John M. Echols) が 1963 年に編纂した『日本時代のインドネシアの印刷物の予備チェック・リスト (Preliminary Check-list of Indonesian Imprints During the Japanese Period March 1942–August 1945 With Annotations)』に掲載されているものも、重複するものを除いて編入された。書籍、新聞、雑誌、演説の草稿等、437 点が掲載されている。

インドネシア国立図書館所蔵の刊行物は、占領期の政策が不徹底であったり、占領期およびその後の独立闘争期等の混乱で散逸したりしたものもあると考えられる。したがって、同図書館の蔵書が当時の刊行物すべてを網羅しているわけではない。しかも、同目録に掲載されたものはほぼすべてジャワで刊行されたものである。ただし、同図書館所蔵の中に、日本の朝日新聞社が刊行した「大東亜共栄圏」向けのグラフ誌『Taiyo (太陽)』が存在する。日本から送られジャワに届いた宣伝誌も含まれている。さらに、バンジャルマシンで刊行された『ボルネオ新聞』中部版とポンティアナックで刊行された『ボルネオ新聞』西部版の日本語版とインドネシア語版が所蔵されている。これは、オランダ領であった南ボルネオの新聞刊行を、朝日新聞社がジャワでと同様に日本軍によって委託されていたためと考えられる。また、2017 年に同図書館が日本占領期に同盟通信社によってパダンに設立されたスマトラ新聞社が発行していた日本語の『スマトラ新聞』を所蔵していることが判明し、スマトラの刊行物が同図書館にまったく献納されることはなかったとは断定できない⁶。

コーネル大学の『日本時代のインドネシアの印刷物の予備チェック・リスト』掲載の刊行物は、コーネル大学の東南アジア研究プログラムにおいて 1950 年代半ばに開始した現代インドネシアプロジェクトの活動の一環として購入したもの、さらに当時の日本占領期のインドネシアに関する研究書等において参考資料として記されている刊行物を加えて編纂された。インドネシア国立図書館目録に掲載されているコーネル大学リストから転載された刊行物 95 点には、ジャワで刊行されたものだけでなく、スマトラ刊行のものが 16 点、さらにバリ島のものが 1 点含まれている⁷。

インドネシア国立図書館目録に掲載されている刊行物がジャワとスマトラにほぼ限定されていることには、次のような背景があると考えられる。

インドネシアを占領した日本軍は、前述したように、当初の軍事作戦上の都合から同領域を 3 分割して軍政を敷いた。各占領地域の統治に関連した政令等は、その軍政地域を対象としていたのであるから、各軍政が刊行した官報等は各領域内のみで流通したと考えるのが妥当であり、管轄外の占領地域にも流通したとは考えられない。1942 年 6 月にジャワの陸軍第 16 軍が公布した布告第 16 号では、東インド領域内の出版物の移出は許可制とされ、まったく禁止されていたわけではない⁸。しかし、陸軍第 25 軍の統治下にあったスマトラで刊行された出版物、そして海軍統治下のボルネオ、セレベス

⁶ 『スマトラ新聞』は、2017 年にゆまに書房から復刊された。

⁷ インドネシア国立図書館目録は入力ミスが少なくとも数か所ある。例えば、Mas'oed, Ki Agoes. 1942. *Sedjarah Palembang Moelai Sedari Seriwidjaja Sampai Kedatangan Balatentara Dai Nippon*, Djakarta: Barisan Propaganda Dai Nippon "Sinar Matahari" の刊行地はジャカルタとなっているが、実際はパレンバンである。入力ミスは確認できたものは訂正して統計を作成した。

⁸ ジャワ新聞社。1944. 『ジャワ年鑑 (昭和 19 年)』(復刻版、ビブリオ、1973 年)、p. 403。

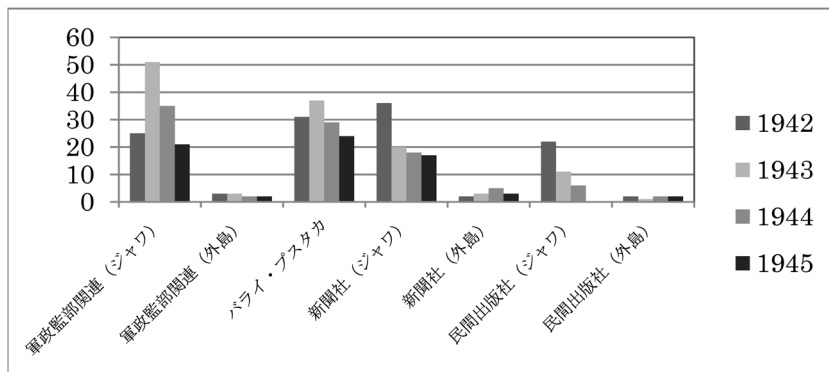
以東の地域の刊行物を陸軍第 16 軍統治下のジャカルタの博物館付属図書館（現インドネシア国立図書館）に献納することが義務付けられたとは考えにくい。

スマトラに関しては、日本が占領後に東海岸州の管轄部隊がメダンに軍政部メダン図書館を設置した⁹。そこに日本占領期の刊行物も献本されたようであるが、詳細はわからない。19 世紀末から 1920 年代にかけてのオランダ植民地時代のスマトラの行政、経済の中心都市は西スマトラのパダンであった。しかし、同地域の優秀な青年たちは、中等・高等教育を受けるために多くがジャワに移り、彼らの多くは日本軍政期にジャワでの出版活動に関与した。1930 年代にはメダン在住のアディ・ヌゴロ（Adi Nugoro, 1906–1967）やハムカ（Hamka, Haji Abdul Malik Karim Amrullah, 1908–1981）等の有力なジャーナリストや作家によって、メダンで活発な出版活動が行われ、それらの刊行物はジャワでも流通した¹⁰。日本占領期に、彼らは陸軍第 25 軍占領下のマラヤの作家たちと交流する一方で、ジャワで 1942 年 10 月に設置されたインドネシア語整備委員会と同様のインドネシア語研究所（Lembaga Bahasa Indonesia）が 1943 年 1 月 15 日にメダンに設置されると、彼らはジャワを訪問する機会もあった¹¹。しかし、日本占領期のジャワとスマトラの間では、後述の通り、ジャワの出版物はスマトラで一定程度流通していたことが分かる程度である。

したがって、インドネシア国立図書館目録に掲載された日本占領期の刊行物に依拠して当時の刊行物について分析することは、ジャワを中心とした出版活動を対象とすることとなる。その点を認識しつつ、その作成に誰がかかわり、その内容の特徴はどのようなものであるかを明らかにすることは、当時のジャワでの宣撫活動が誰によって行われ、それがインドネシアの社会にどのような影響を与えたのかを理解することの一助となる、と考える。

『インドネシア国立図書館目録』に掲載されている刊行物の点数は 437 点で、印刷・製本されていないものを除いて、出版元・年代別刊行点数を分析した。（グラフ 1）

グラフ 1 インドネシアにおける出版元別刊行物の点数（1942–1945）



⁹ 田中館秀三. 1944. 『南方文化施設の接収』時代社, pp. 229–230.

¹⁰ 山本信人. 1995. 「メダンのロマン・ピチサン—1930 年代末インドネシア文化地図と大衆小説をめぐる政治—」『法学研究』11 号, pp. 162–163.

¹¹ Lembaga Bahasa Indonesia. 2604 [皇紀] (1944). *Istilah Bahasa Indonesia*, Medan. また、在昭南（シンガポール）のマライ新聞社から月刊誌『スマンガット・アシア（Semangat Asia, アジアの活力）』が 1943 年 1 月 1 日に創刊された。創刊目的の 1 つは、日本によって統一されたマラヤとスマトラの人々の交流の促進にあった。

出版元に関しては、軍政監部（1942年8月以前は軍政部）とその内局、バライ・プスタカ（Balai Pustaka, 図書の館）、新聞社、そして民間の出版社の4つの大枠に分類した。なおバライ・プスタカは、陸軍第16軍がジャワを占領後の当初は司令部直属の宣伝班の管轄下に置かれ、その後軍政監部文教班（局）下に移った。すなわち、軍政監部下の機関となったため、軍政監部から独立させて分類すべきではないとも言える。しかし、バライ・プスタカは、良質な図書をインドネシアの人々に提供することを目的の一つとしてオランダの植民地時代の1917年に植民地政府によって設立され、それが日本占領期そしてインドネシア独立後も存続した。印刷物の出版活動では一貫して重要な役目を担ってきたと考えられるため、軍政監部とは別個に扱った。

2. 軍政監部

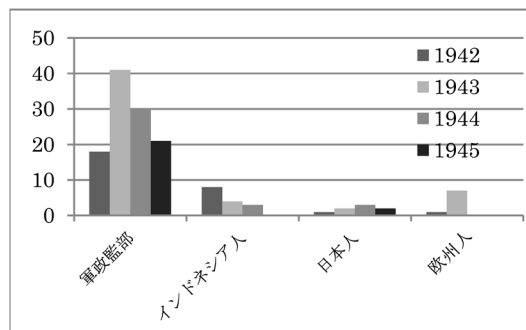
日本占領期の刊行物の点数に関しては、軍政監部関連のものが約140点と目録の中では最も多い。前述したように、インドネシアは3分割されて軍政が実施されたため、各地域に軍政監部（海軍地区は民政府）が設置された。ジャワでは、1942年3月5日にジャカルタを占領後に軍政部が設置され、8月1日には軍政監部へと改編された。

(1) 書き手と内容の概要

ジャワの軍政監部とその内局による刊行物の書き手を示したものが、次のグラフ2である。軍政監部が発行元であり著者の名前が記されていない刊行物は軍政監部を書き手としてカウントした。個人名が書き手となっているものは、名前から判断して、インドネシア人、日本人、欧州人に分類した。

軍政監部の刊行物を官報等、学校用教科書および青年団等の社会教育関連教科書、軍政監部傘下の研究所や啓民文化指導所による刊行物を3つに分類して、その特徴を次に明らかにした。

グラフ2 軍政監部関連刊行物の書き手



A. 『KAN PO: Berita Pemerintahan (官報)』等

占領軍がインドネシアの占領目的を示し、占領の正当性をジャワ在住の人々に理解させる（政策の周知、それは広義の意味で宣伝）ために最初に発布したのは、1枚のビラである「Maklumat No.1（布告第1号）」であった。同布告は、陸軍第16軍が日本を出発後に寄港した台湾で日本語、インドネシア語、オランダ語、および中国語で作成、印刷された。インドネシア語への翻訳は、戦前にジャワでジャーナ

リストとして活動していた市来竜夫（1906-1949）、谷口五郎（1902-1996）や中谷義男（1914-1972）が中心となって行った。オランダ語訳は、当時日本の東京外語学校（現在の東京外国語大学）のマライ科で教鞭をとっていたスジョノ（Mr. Raden Soedjono, 1905 年生）が担当した¹²。中国語訳については、現存するものが確認できていないため不明であるが、中国語にも翻訳されたのであれば、占領軍が華人系の人々を「原住民」とは明確に区別して認識していたことを示している。布告第 1 号は、陸軍第 16 軍がジャカルタを制圧後の 1942 年 3 月 7 日に公布された。それ以降も次々と布告・政令が公布され、正文とされた日本語の布告・政令は、軍政監部の掲示板に貼りだされ通知された¹³。ただし、インドネシア語翻訳文も作成された。インドネシア語への翻訳は、谷口五郎が配属された総務部企画課に翻訳室が設置され、インドネシア人作家で法科大学卒のタクディル・アリシャバナ（Mr. Sutan Takdir Alisjahbana, 1908-1994）等が雇用されて行った¹⁴。軍司令官による治政令だけでなく、軍政監が発する治監令、州長官や特別市長が発する州令や特別市令、などの法規命令があった。

ここで留意すべき重要な点は、布告や政令の作り手はあくまでも日本軍政であることだ。日本の大本営政府連絡会議や大本営陸軍部、そしてジャワを占領した陸軍第 16 軍の司令部と軍政監部が決定した占領統治の基本方針に基づいたものである。その一方で、占領統治を円滑に行うためには、現地社会の状況を考慮する必要性もあった。軍政監部は、台湾等での植民地統治経験の反省の上に、1942 年 11 月 8 日に立ち上げた旧慣制度調査委員会等を通して、現地のインドネシア知識人との意見交換の場を設けて、必要に応じて彼らの意見を統治政策に反映させた¹⁵。また、1943 年 9 月に中央参議院が設置され、インドネシア人の政治参与は拡大される方向へ進んだ。しかし、政策等の最終決定はあくまで日本占領軍、日本政府であり、それらの決定を現地住民に伝える『KAN PO』等の刊行物の書き手は、あくまでも軍政監部であった。日本語からインドネシア語への翻訳作業では、補足説明も加えられたが、それは現地の人々の理解の促進を図るためであり、日本語の正文内容を逸脱したものはない。

これらの膨大な法規等は、インドネシア独立後の国家建設の一環としての法整備に参照されたかもしれないが、占領期においてはインドネシア人の主体的かかわりは少なかった。後述するように、オランダ領東インドでただ 1 つのみ存在した法科大学も再開されなかった。

ただし、インドネシア人の日本軍政監部での地位が徐々に高まりを見せていることを示す刊行物も存在する。1944 年に軍政監部が刊行した『ジャワのインドネシア人名士（Orang Indonesia Jang Terkemoeke di Djawa）』である。日本軍政に何らかの形で係るジャワ在住のインドネシア知識人 2,990 名の経歴が記された名士録は、インドネシア語で書かれ、当時のインドネシアの知識人との相互交流に利用されたであろう¹⁶。

¹² 谷口五郎. 1991. 「ジャーナリストとしてみたジャワ軍政」, 前掲書, p. 268.

¹³ 布告第 40 号（治政令第 9 号）「軍政令に関する件」（1942 年 10 月 5 日）.

¹⁴ 日本占領期フォーラム編. 1991. 前掲書, pp. 272-273.

¹⁵ 旧慣制度委員会については、次を参照。戸田金一. 1977. 「インドネシアにおける地方語教育の尊重」『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』第 27 号, 1977 年 2 月.; 後藤乾一・山崎功. 2001. 『スカルノーインドネシア「建国の父」と日本』吉川弘文館.

¹⁶ 1944 年 11 月時点でのジャワの陸軍軍政要員は推計で 3,692 人である。（秦郁彦. 1998. 『南方軍政の機構・幹部軍政監一覽』南方軍政史研究フォーラム, p. 7.）それを少しだけ下回るほどのインドネシア人の軍政要員の協力を得なければならなかった。ただし、同名士録は「原住民」のみが収録されているが、同年 4 月に刊行された『ジャワ年鑑（昭和 19 年）』に付けられた「現地住民知名人録」は、「原住民」と「華僑」から構成されている。

B. 学校用教科書と社会教育のための教科書

学校用教科書

文教班は、当初総務部企画課内に置かれたが、1942年12月1日に内務部が設置されると、同部の文教局へと組織替えがなされた¹⁷。文教班の初代班長は、東京帝国大学法学部卒で戦前に台湾銀行バタヴィア（ジャカルタ）支店長を務めていた森亮太郎が就き、1943年3月末には、北海道帝国大学農学部出身の文部省官僚であった尾崎卓郎となった。

日本政府による占領地における教育方針は、1942年3月14日に決定された「占領期軍政処理要綱」で欧式教育の是正と日本語、日本文化の普及が示されていただけであり、ジャワでは1942年4月22日の布告第12号「学校再開ニ関スル件」によって、オランダ語を教授用語とする小学校は閉鎖され、地方語（マレー語、ジャワ語、スندا語、マドゥラ語）を教授用語としていた初等学校〔村落学校（3年）→継続学校（3年）；2級小学校（5年）→連鎖学校（3年）〕は地方語による初等国民学校（3年）と高学年ではマレー語を教授用語とした国民学校（6年）へと編成された。それに伴い必要となった作業が、国民学校の高学年で用いるマレー語の教科書の作成であった。

その後、日本政府が諮問機関として1942年2月21日に設置した大東亜建設審議会の文教部会が5月4日に「大東亜建設に処する文教政策答申」を提出した¹⁸。同答申は、（1）皇国民ノ教育錬成方策と（2）大東亜諸民族ノ化育方策に分けられていた。インドネシアを「帝国領土」として（1）の方策を実施するのか、「大東亜共栄圏」のなかで「独立」の地位を与えて（2）の方策を実施するのか、日本政府のインドネシアに対する方針には揺らぎがあった。1941年11月20日の「南方占領地行政実施要項」では、「原住民」の独立運動は過早に誘発することを避ける方針であった。1943年5月31日決定の「大東亜政略指導大綱」は、マラヤ、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベスを「帝国領土」と決定し、同年11月5-6日に開催され大東亜会議にはそれらの地域の人々は招待されなかった。しかし、インドネシアの人々の協力を得るために、ジャワでは「政治参与」を徐々に認め、1944年9月7日に当時の小磯国昭首相（在任期間は1944年7月22日-1945年4月7日）はインドネシアの将来の独立を約束せざるを得なかった。以上のジャワの占領期の扱いに関する方針の経過を辿ると、インドネシアの文教方針は（2）から（1）へと移行し、さらに（2）に戻ることとなったと考えられる。しかし、3年半という短期間の占領においては、当初の（2）の方針に基づく政策が続けられた、と理解する方が実情に則している。それは、次に検討する教科書作成の過程からも知ることができる。

大東亜諸民族の文教政策の基本方針（2）の内容は、①大東亜建設の世界史的意義を諸民族に徹底し、その完遂の共同責任を自覚させること、②欧米優越観念の排除、③圏域内の諸民族の文化・現地の固有語は尊重するが、日本語を普及させ、日本文化を中心に圏域文化を統一させること、であった。日本の植民地であった朝鮮や台湾にも適用した（1）の皇民化政策を大東亜諸民族にも適用しようとしたわけでは必ずしもない。その基本方針の具体的方策として、青少年に重点が置かれ、教科書の改編、教育者の派遣、敵性を帯びる要素の肅正、そして技術的訓練の普及に主眼を置いた¹⁹。

¹⁷ 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題。1991。『極秘 爪哇に於ける文教の概況』復刻版、龍溪書舎、p. 3。

¹⁸ 企画院・大東亜建設審議会編・石井均、明石陽至解題。1995。『大東亜建設審議会関係史料—総会・部会・速記録—』復刻版 第1巻、『極秘 昭和十七年七月 大東亜建設基本方策（大東亜建設審議会答申）』龍溪書舎、pp. 4-11。

¹⁹ 同答申、pp. 10-11。

では、文教方針③の日本語の普及のために、どのような学校教科書が作成されたのであろうか。4月初めから日本語の教科書の作成を、宣伝班報道課の市来竜夫、バライ・プスタカのタクディル・アリシャバナ、および日本侵攻前にジャカルタ第一普通中学校（MULO）の教師であったパラル（Palar）が共同で行っている、と宣伝班が発表した²⁰。日本語とインドネシア語を理解できる者による協働の必要性が強調された。おそらく同教科書とは、当時宣伝班の管轄下にあったアジア・ラヤ新聞社から刊行された日本語の教科書数点のうちの1点であろう。この時点では、大東亜建設審議会の文教部会の答申は提出されていなかったため、「占領期軍政処理要綱」に従った作業であった。

軍政内の文教班が編纂し、最初に刊行したものが1942年の『ニッポンゴ マキ一』『ニッポンゴ マキ二』である。文教班長であった森亮太郎と同班企画主任の宮村三郎、興亜同盟の林総裁秘書が原稿を作成し、南従義がインドネシア語訳を付した²¹。南は、戦前ジャワのバンドンでジャーナリストとして活動し、日本占領軍の囑託としてインドネシア語と日本語の通訳・翻訳を行っていた。この『ニッポンゴ』は、1943年までに第5巻まで作成された²²。『インドネシア国立図書館目録』には、1942年刊行の第1巻と第2巻が所収されている。

一方、国民学校におけるその他の学校教科書については、第3学年までは地方語が用いられたため、第3学年までとそれ以降に分けて理解する必要がある。オランダ植民地時代の初等教育は、オランダ語原住民学校（HIS）以外の「原住民」の学校では教授用語は一般には地方語であった。ジャワでは、スダ語、ジャワ語、マドゥラ語が中心であったが、必要に応じてマレー語の教科書も用いられていた。日本占領期には、1942年7月22日の治政第59号で初めて国民学校の授業科目と時間割が定められた。この時点では、前述の大東亜建設審議会の文教部会の「大東亜建設に処する文教政策答申」はすでに提出されていたため、参照されたとと思われる。同カリキュラムでは、地方語は第1学年から第6学年までの学科目として授業があった。また、図画、衛生、手芸など第1学年から授業科目にあったものは、第3学年までは地方語を教授言語として用い、第4学年からはマレー語が用いられた。第4学年以降に授業科目となる科学、地理、歴史はマレー語が教授用語として用いられた。第3学年までの授業科目はオランダ色が内容に反映されにくい図画、衛生、手芸などであったため、応急措置としても教科書の改訂は小規模のものであった、と言えよう。第4学年以上の教科書は、オランダ植民地時代のマレー語の教科書を検討した上で²³、必要に応じてそれ以外の地方語の教科書も検討し、新しいマレー語による教科書が作成された。旧教科書の検討基準は、文教方針の②の英米優越観念の排除にあった。その検討の上に、教科書の表紙だけを付け替えたもの、あるいはオランダ色を排除する改訂がなされて、マレー語以外のジャワ語等地方語による教科書はマレー語に翻訳されて刊行された。しかし、1942年4月29日公布の布告第15号によって紀元には皇紀を使用することが定められていたが、刊行年を2603年としているにもかかわらず本文中では西暦を用いている教科書『国民学校用の人体の授業I (Peladjaran Badan Manoesia I oentoek Sekolah Ra'jat)』などもあり²⁴、短期間

²⁰ Hoodooka (Batavia, 17 April 2602) "Tentang boekoe peladjaran bahasa Nippon" *Kan Po* Nomor Istimewa 9-3, 2603 [皇紀] (1943), p. 41.

²¹ 鈴木静夫・横山真佳編著。1984。『神聖国家日本とアジア—占領下の反日の原像』勁草書房, pp. 181-182.

²² 大日本軍政部編・爪哇軍政監部編・倉沢愛子編。1993。『日本語教科書』復刻版, 龍溪書舎。

²³ ジャワ新聞社。1944。前掲書, p. 139.

²⁴ 乾千代。1998。「日本占領期ジャワの国民学校教育」『東南アジア—歴史と文化—』No. 27, p. 104.

での作業は混乱を極め、杜撰な教科書作成が行われた。『ジャワ年鑑』にも、当初の教科書作成は応急の措置であったと記されている²⁵。

ジャワでは、初等学校再開から1年半が経過した1943年9月1日になってようやく治政総第755号「学校教育対策基本要綱」が公布された。その4か月前に、前述した1942年7月に作成された最初のカリキュラムが、1943年5月11日公布の治政総第219号「国民学校ノ教科科目等改正ニ関する件通牒・国民学校教科科目等改正要領」に基づいて改訂された。マレー語の授業は、第2学年からであったものが第3学年からに、そして全学年を通して地方語の授業が行われたことには変化がない。これは、1942年11月に設置され、翌年になって始動した旧慣制度調査委員会でのインドネシア人側の主張が受け入れられたためと思われるが、それはまた現状を追認せざるを得ないことを意味するものであった。また、数学は算数となったが、これも全学年を通して授業があり、授業時間が多い科目であることには変わりがなかった。さらに、歴史と地理は第4学年からで、授業時間も非常に少ないことには変化がなかった²⁶。

この要領の大きな改編は、それまで第4学年から教えられていた日本語が第1学年から第6学年まで通して教えられることとなったことである。日本語の教科へより重点が置かれた。また、それまでの「道徳」が「修身」に変更された。それによって、文教局が独自に作成した教科書として修身の教科書が登場することになる²⁷。新しい教科書を用意するためには時間を要したため、1943年末の時点の修身の教科書は、『道徳教育 (Didikan Boedi Pekerti)』と『先生の話 (Tjeritera Goeroe)』であった。国民学校の教科書を分析した乾千代によると、両教科書には、日本の国民学校における「皇国民錬成」を目標として制定された1941年3月の「国民学校施行規則」が多少は反映されている。しかし1943年の改正要領を受けて1944年以降に刊行された修身の教科書『ヨイコドモ』上下2巻には、より色濃く同規則の趣旨が反映された²⁸。ただし、その後のインドネシア独立容認へと向かう日本軍政の動きに鑑みると、この変化は、文教政策においてジャワ在住のインドネシア人に対して(1)皇国民ノ教育錬成方を適用しようとしたというよりは、インドネシアの防衛のための教育錬成の強化を図る狙いがあった、と捉えるべきであろう。

日本の文教政策の不明瞭な動きは、国民学校用の歴史教科書からも知ることができる。前述した大東亜建設審議会文教部会の「大東亜建設に処する文教政策答申」の中の「大東亜諸民族の化育に対する方針」の①大東亜建設の世界史的意義を諸民族に徹底し、その完遂の共同責任を自覚させること、の趣旨に沿った国民学校用歴史教科書は3年半という短い占領期間には作成されなかった。同答申の「皇国民ノ教育錬成方策」で示された「歴史教育ヲ刷新シ皇国ノ史観ニ徹セシメ…」という明確な方針はジャワでは示されなかったといえよう。換言すれば、そもそも皇国史観を含めて①に合致した内容の歴史とはなんであるか、提示することができなかったと考えられる。

『インドネシア国立図書館目録』に所収されているジャワの文教局が刊行の歴史教科書は、1943年末に刊行された国民学校第5学年用のマレー語による『昔話 (Tjeritera Lama)』第2版のみであ

²⁵ ジャワ新聞社。1944。前掲書、p.139。

²⁶ 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題。1991。前掲書、pp.129-130, pp.188-194。

²⁷ 倉沢愛子。1992。『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社、pp.348-349。

²⁸ 乾千代。1998。前掲論文、pp.101-102。

る²⁹。ジャワの神話等に登場する英雄たちを各章1名扱い、26章から成る。序文の日付が2603(1943)年11月となっている。「本版には少し変更が加えられている」と記されているため、初版に変更を加えたものであることが理解できる。初版はオランダ植民地時代に刊行されたものを日本の文教局が改訂して刊行したものなのか、文教局の監督のもとに新しく刊行したものなのか、現時点では不明である。文教局の名前で書かれた序文には、「生徒たちはある出来事の起こった時や時代を区分することをまだ教えられていない、そこで、5年生の生徒たちが歴史についての基礎的な知識を得ることができるようになることが(本書を出版した)我々の意図である。その年代の子供たちは親から聞くことのできる物語(おとぎ話)を聞くことが大好きである。たとえこの類の物語の多くが荒唐無稽の内容を含んでいても、歴史の基礎的な知識に役に立つ。」と記されている。同書は、インドネシア独立後の1946年にバリ・プスタカから再刊された。序文は1943年版と一字一句違わない。本文は、「ニ・ロロ・キドゥル(Nji Loro Kidoel)」の章がなくなり、25章になった。そしてその後も版を重ねて刊行された。筆者が確認できただけでも、1956年に第5版まで刊行されている。日本占領期に刊行された第2版の内容は、日本の大東亜共栄圏の諸民族に対する歴史教育の方針の影響を受けていない。作成にあたったインドネシア人の主体性がみられる。

中等レベルの学校は、1942年9月10日公布の治政総第252号「官立中学校再開に関する件」を受けて、初等中学校、高等中学校、師範学校、女子技芸教師養成所が開設された。初等教育の教科書はオランダ植民地時代のマレー語を含めた地方語で書かれた教科書に依拠していたのに対し、1900年代初頭から設立されたオランダ植民地時代の中等・高等学校の教科書はすべてオランダ語で書かれたものであったため、それらを翻訳する作業が必要であった。1942年11月の時点で、オランダ植民地時代の中等学校の教科書35点がバリ・プスタカの翻訳部によってオランダ語からインドネシア語へ翻訳され、印刷を待っている状態であった³⁰。おそらく文教班が内容を確認する作業を行っていたのであろう。なお、当時のバリ・プスタカの翻訳部長は前出のタクディル・アリシャバナであった。この作業については、日本占領期を描いた彼の小説『敗北と勝利』で触れられている³¹。彼については、バリ・プスタカの項目で再度触れる。

1943年に入ると、実業教育のための工業学校が開設され、さらに同年4月には、オランダ植民地時代の医科大学(前身はSTOVIA)が1943年4月13日付軍政監告示第5号でジャカルタ医科大学として学則が定められて同年5月1日に再開された³²。学長には、京都帝国大学医学部を卒業し九州帝国大学医学部教授であった板垣政参が就任した。バンドン工業大学も、同年10月1日に治政秘第880号「バンドン工業大学設立要綱ノ件」が公布されたことによって、翌年4月1日に再開された³³。東北帝国大学理学部卒で第6高等学校長であった長岡寛統が大学長に就任した。しかし、日本占領期中に法科大学は再開されなかった。

オランダ植民地時代の1920年代に設立されたこれらの大学では、英語、ドイツ語、フランス語の

²⁹ Kantor Pengajaran. 2603 [皇紀] (1943). *Tjeritera Lama Tjetakan Kedoera*.

³⁰ *Pembangun*, 20 November 2602 [皇紀] (1942).

³¹ Alisjahbana, St. Takdir. 1992. *Kalah dan Menang*, Jakarta: Penerbit Dian Rakyat, pp. 133-134. 日本語訳『戦争と愛』が井村文化事業社から1983年に出版されている。

³² 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題. 1991. 前掲書, pp. 177-183.

³³ 同書, pp. 228-233.

教科書が使用された³⁴。『インドネシア国立図書館目録』には、日本占領期の医科大学の教科書が2点掲載されている。A. ラマリ (A. Ramali) の『妊娠, 出産, 産後時にバヌア人が従う慣習と伝統医療 (Adat Kebiasaan dan Pengobatan: Asli Orang Banoea Yang Ditoeroet pada Waktou Hamil, Bersalin dan Selama Nifas)』が同大学内科から、また、B. Z. ラサド (B. Z., Rasad) の『植物学 (Ilmoe Toem-boeh-Toemboehan)』が薬学部から刊行された。オランダ植民地時代の1875年以前の医学学校ではマレー語が教授用語であったが、それ以後、1901年のSTOVIAへの改編、1927年の医科大学への昇格後も含めて、西洋の言語の教科書が用いられた。したがって、インドネシア語で医学書の教科書を執筆することには、インドネシア語による医学用語が整備されていなかったために困難が伴ったと考えられる。ただし、日本の医学はドイツなどの西洋医学の影響を強く受けていたので、その内容はオランダ植民地時代の医科大学のそれと大きく変わったとは考えられない。大学の教科書については未だ十分な分析がなされていないため、今後の課題と考える。なお、バライ・プスタカから刊行されたインドネシア語あるいはジャワ語で書かれた著書は、のちにインドネシア大学医学部教授となるモフタル (Raden Mochtar) とガジャマダ大学初代学長となるサルジット (Sardjito) によるものであるが、これらは大学の教科書ではなく、一般向けの保健書であった³⁵。

社会教育のための教科書

大東亜建設審議会の文教部会が1942年5月4日に提出した「大東亜建設に処する文教政策答申」の中の「大東亜諸民族ノ化育方策」では、「皇国民ノ教育錬成方策」の中で強調された「文武一体ノ精神ヲ基トシ」た「軍教ノ有機的・一体性ノ確立」といった表現は出てこない³⁶。

ジャワでは、1943年半ば以降に心身の錬成が強調されるようになる国民学校教育に先立ち、社会教育において、その点が強調された教科書が作成された。1942年10月に農民道場が設立され、翌年1月に中央青年訓練所が設立され、同訓練所で養成された指導者が4月にはジャワ全島にわたって設けられた青年団の指導にあたった³⁷。

インドネシア国立図書館目録には、青年団での社会教育等のための教科書が6点所収されている。それらはすべて軍政監部や文教局錬成課等の名称で刊行されている。例えば1943年に刊行された『“ジャワ青年団”のための教練教授法 (Tjara Mengadjar Kyoren oentoek “Djawa Seinendan”)』の指針 (Pedoman) では、「ジャワの青年団の青年に対し軍事教練 (latihan dan didikan kemiliteran) を与えなければならない」と記され、軍事に関連した教練であることが明記されている。そして第1部では、「キョッケ」や「ヤスメ」の動作が、写真入りで細かく示されている。1943年に刊行された本書は、ジャワの日本軍の将兵が太平洋地域における戦場へと転進し、ジャワの防衛にインドネシア人をあてる歩兵制度が同年春、そして11月には防衛義勇軍 (PETA) が編成されたことと関係があると考えられる。それに合わせて、宣伝部所属であった市来竜夫は防衛義勇軍指導部に勤務し、義勇軍

³⁴ 文部省教育調査部。1942。『南方圏の教育』, p. 105。オランダ植民地時代の普通中学校 (MULO) では、オランダ語で授業が行われ、外国語は必須教科であった。英語は必須言語で、その他にドイツ語とマレー語、あるいはドイツ語とフランス語の組み合わせで外国語の教科を選択しなかった。マレー語は外国語科目であった。(Chanafiah, M. Ali dan Chanafiah (Pane), Salmiah. 2010. *Perjalanan Jauh: Kisah Kehidupan Sepasang Pejuang*, Bandung: Ultimius, p. 22.)

³⁵ バライ・プスタカ図書番号 No. 332, No. 1536, No. 1567。

³⁶ 企画院「極秘 昭和十七年七月 大東亜建設基本方策 (大東亜建設審議会答申)」, pp. 4-11。(企画院・大東亜建設審議会編。1995。前掲書。)

³⁷ ジャワ新聞社。1944。前掲書, pp. 133-134, pp. 138-140。

兵補を対象とする隔週誌『プラジュリット (Prajurit, 兵士)』を監修して刊行した。前述したように、国民学校でも 1944 年の修身の教科書では「皇国民鍊成」の要素が強い政策がより反映されるようになった。

1944 年 9 月 7 日に日本の小磯国昭首相がインドネシアに対して将来独立を許可する声明を出す、ジャカルタの海軍武官府が 1944 年 10 月に、独立後のインドネシアの最高指導者を育成することを目的として独立養正塾 (Asrama Indonesia Merdeka) を立ち上げる。これはセレベス (スラウェシ) 海軍民政府からジャカルタの海軍武官府に転属となった吉住留五郎 (1911-1947) が構想し、同武官府で働いていたアフマド・スバルジョ (Ahmad Subardjo) が管理運営を行った。そこでどのような教科書が用いられたかは不明であるが、ハッタやシャフリルなどの民族主義者が講義を行った。次章で触れる『インドネシア史 (Sejarah Indonesia)』をバライ・プスタカから上梓したサヌシ・パネ (Sanusi Pane, 1905-1968) がインドネシア史の講義を担当した。同書が教科書として用いられた可能性が高い。これに続いて、軍政当局は 1945 年 3 月 1 日に独立準備委員会 (Badan Penyelidik Usaha Persiapan Kemerdekaan Indonesia, BPUPKI) と建国学院の設立計画を発表した。独立養正塾によって代わり、軍政主導の色彩の強い建国学院が翌月、陸軍中将田中稔を学院長として開校し、インドネシアに関する講義と並行して日本の政治や歴史の講義を提供した。しかし、4 か月後には日本の敗戦となり、そこで用いられた教科書は現時点では確認されていない。

C. 研究所、啓民文化指導所

『インドネシア国立図書館目録』には、軍政監部所属の各種研究所等の報告書が所収されている。これらの研究所は、オランダの植民地時代に設立されたものが改名や組織改編されたものである。

ジャカルタ衛生試験所 (旧エイクマン研究所)、癩研究所、マラリア研究所は、統合されて熱帯医学研究所となり、ジャカルタ医科大学の付属機関となった。所長には、東京帝国大学医学部卒で、前熊本医科大学長であった黒沢良臣が就任した。パストゥル研究所はバンドン防疫研究所と日本名に改称され、九州帝国大学医学部卒で陸軍軍医中将の松浦光清が所長を務めた。それまで所長を務めていたオッテン博士 (Dr. Otten) は残留した。古美術研究所は古跡調査局 (Oudheidkundig Dienst) が名称変更したものである。

ボゴールには、オランダの植民地時代に世界に誇るボイテンゾルグ (ボゴール) 植物園があったが、同園の 7 部門の一つの腊葉館館長のファン・スローテン博士が、ボイテンゾルグの農業専門学校で研究していた成沢農学士の下、さしあたり管理を行った。その後同園は 3 部門に再編成され、元東京帝国大学の植物学者であった中井武之進、九州帝国大学の金平亮三教授、等が管理を行った³⁸。ボゴールには、オランダ植民地政府の経済省管轄の農事試験場と中央林業事務所、そしてボゴール農業大学の前身の農業専門学校、林業専門学校、獣医学校等があったが、すべて日本が接収した。

インドネシア国立図書館カタログには、在ボゴールの農事試験場や林業試験場の刊行物が 14 点掲載されている。農事試験場のものは 1942 年と 1943 年に刊行されたもの 13 点であり、それらはすべて著者が欧州人である。また、英語で書かれたものが大半で、オランダ語の、あるいはオランダ語からインドネシア語に翻訳されたものも数点含まれている。オランダ植民地時代の研究所等は日本が接収し、その所長には日本人が就いた。ただし、前述のオッテン博士のように何らかの形で残留したオ

³⁸ 田中館秀三. 1944. 前掲書, pp. 151-159.

ランダ人研究者も存在した。また、オランダ植民地時代の 1930 年代に開校した高等教育機関やオランダへの留学の機会を得て、人文社会科学や自然科学の学問を修めたインドネシア人も非常に少数ではあったが存在した³⁹。彼らによって、研究成果がオランダ語等の西洋語で刊行された。あるいは、管理者が日本人にとって代わった後にも、それ以前にオランダ人等によって執筆された研究報告書が再刊された場合もある。

大阪商科大学（現大阪市立大学）の予科教授の時に日本軍に徴用され、陸軍第 16 軍の嘱託としてジャワに赴任して南方文化研究室を設置して室長となった別枝篤彦が最初に行ったことは、オランダ植民地政府が設立した研究所巡りをするのであった。それらの研究所には、多くのオランダ人研究者が逃げずに留まっていた⁴⁰。ジャワを占領した陸軍第 16 軍の司令官今村均は、ジャワに残留していたオランダ人に対して寛容であった。また、ジャワ軍政の最高顧問であった児玉秀夫の勧告によって、王立東インド自然科学協会図書館は保護された⁴¹。そこに南方文化研究室は事務所を構えた。

ただし、オランダ植民地時代の学術・文化施設を保存する方針をとったのは、ジャワの今村均最高司令官や児玉秀夫最高顧問等だけの個人的な方針ではなかった⁴²。大東亜建設審議会の文教部会が 1942 年 5 月 4 日に提出した「大東亜建設に処する文教政策答申」の「皇国民ノ教育鍊成方策」には、「東西文化ヲ摂取醇化」という文言も含まれていた。

このように、日本のインドネシアでの占領政策—それは「大東亜共栄圏」建設といいかえられたが—は、オランダ色の排除や欧式教育の撤廃を政策とする一方で、日本人に対して古来の日本文化の優秀性を自覚徹底させたうえで「東西文化ヲ摂取醇化」によってそれをさらに向上させることがあげられたため、植民地時代にインドネシアに関して蓄積された学問の成果、そして西洋で発展してきた学問全般の成果に依存しなければならない、という矛盾を抱えることとなった。すなわちインドネシアを占領した日本軍は、一方でオランダ語やオランダ式教育を排除しながら、他方でオランダ人等が設立・管理していた研究所等において、オランダ人にとって代わって自分たちがそれらを管理する所長等につき、それまでの研究成果を利用した。

その政策の矛盾は、1942 年 11 月にラバウルに転出した今村均の後任の原田熊吉司令官の下、軍政監部総務部長であった山本茂一郎が 1943 年 9 月 19 日に公表した「混血住民に告ぐ」当局談によって露呈し、日本軍政の大きな転換点となった。すでに同年 1 月に、軍政当局はジャワ在住の 15 万人の印欧混血人に対し、日本軍政に協力する者は原住民に準じる待遇をすることに吝かではない旨の談話を発表していたが、期待した反応を得ることができないでいた⁴³。そこで再度、9 月に当局談を発表

³⁹ オランダ植民地時代のエイクマン研究所の 1938 年の年次報書には、同研究所の研究員による 10 点の論文が 1937 年中に審査を通して科学学術誌に掲載されたことが報告されている。その論文の執筆者の中には、オランダ人研究者に混じって、A. モフタル (A. Mochtar) や R. スシロ (R. Soesilo) 等のインドネシア人もいた。(Baird, J. Kevin and Marzuki, Sangkot. 2015. *War Crimes in Japan-Occupied Indonesia: A Case of Murder by Medicine*, Potomas Books, An Imprints of the University of Nebraska Press, p.65.) A. モフタルは、アムステルダムで医学を修め、日本占領期にエイクマン研究所の所長となるが、その後同研究所は熱帯医学研究所に統合された。A. モフタルは、ジャカルタ医科大学の教授となるが、ロームシャ（労務者）に破傷風菌の入ったワクチンを注射した嫌疑をかけられ、1945 年 7 月に日本軍によって処刑された。

⁴⁰ 別枝篤彦. 1991. 「南方文化の研究にたずさわって」(インドネシア日本占領期史料フォーラム『証言集 日本軍政下のインドネシア』龍溪書舎, p. 368.)

⁴¹ 田中館秀三. 1944. 前掲書, p. 150.

⁴² 今村均は 1942 年 11 月にラバウルへ転任、児玉秀夫は 1944 年 7 月までジャワに在任。

⁴³ ジャワ新聞社. 1944. 前掲書, p. 226.; 『ジャワ新聞』1943 年 9 月 20 日。

することとなった。同談話では、「印欧人はインドネシア社会に属するべきである」と、欧亜混血人の E. F. E. ダウウェス・デッケル (E. F. E. Doewes Dekker, オランダ人の父とドイツ人とジャワ人の混血である母との間に生まれた) の例を示した声明を出した。この談話を機に、忠誠を示すことを拒否した大多数の欧亜混血人が拘束されて収容所に入れられたが⁴⁴、忠誠を誓ったものは拘束されずにそのまま研究所等で働いた。また収容所に入れられた者の中にも、そこから研究所に通い日本の敗戦まで留まっていた者も存在した。ジャワの統治にあたって教育を受けた人材の不足に直面した日本軍政が⁴⁵、いわゆる原住民だけでなく、欧亜混血人、華僑、そしてアラブ系等の人々も動員して「五族協和体制」を作ろうとした。その政策を示した談話であり⁴⁵、それはそのまま 1944 年 3 月 1 日に発足したジャワ奉公会に反映された。それと呼応する形で、「現地民」という用語が作られた。1944 年 8 月 1 日付で軍政監部は「現地民職員人事事務提要」を発表した。そこで用いられた「現地民」は、いわゆる「原住民」とは区別して、ジャワにおいて昔から永住していた者を悉く含む用語であった。すなわち、華僑、アラブ系の人たちも含まれた。したがって、そのような人々も広く官吏に任用する方針が打ち出された。そこにオランダ人とその混血人が含まれるかどうかは明示されていないが、以上の経緯を考えると日本軍政に忠誠を誓ったものは含まれるべきであった。一方、「現地民」のほかに「日本人以外のもの」という用語も存在し、これは敵性人、外国人、およびオランダ人を含めていない⁴⁶。また、オランダ人の給与は、1943 年 8 月の時点では「現地民」とは別途定めることとなり⁴⁷、官吏任用において、収容の有無を問わずオランダ人は区別された。日本軍政の思惑とは裏腹に、オランダにとって代わってインドネシアを支配した日本に対し、オランダ人や印欧混血人の忠誠を得ることは難しかった。説明が長くなってしまったが、前述した欧米人による英語等で書かれた研究所の報告書の存在背景には、以上のような日本軍政の方針があった。

さて、既存の機関を接収して日本軍が活動を行う一方で、まったく新しい機関を立ち上げることもあった。例えば、日本軍政監部は宣伝部を中心にインドネシア人の文学者・芸術家等を育成することを目的として啓民文化指導所を 1943 年 4 月に設立した。同指導所は、これまでの研究では、既存のバライ・プスタカに対抗して設立されたものであるとの解釈がなされている⁴⁸。しかし、インドネシア人の文化人を育成する活動は、それによってインドネシアの文化的アイデンティティを確立しようと考えていたインドネシア人文化人が持っていた計画と考えられる。それを日本側が察知して、日本のイニシアティブで設立したのが啓民文化指導所であった。同研究所には、文学だけでなく絵画、映画、音楽などの分野があり、そこに日本軍によって徴用された評論家の大宅壮一、作家の武田麟太郎、画家の河野鷹思、作曲家の飯田信夫などが指導員として配属された。しかし、啓民文化指導所のインドネシア人の主要なポストには、サヌシ・パネ、およびアルメイン・パネ (Armijm Pane, 1908-1970)、そして H. B. ヤシン (H. B. Jassin, 1917-2000) など、バライ・プスタカに勤務してい

⁴⁴ 『ジャワ新聞』1943 年 9 月 20 日；ジャワ新聞社。1944。前掲書、p. 147；深見純生編。1993。『日本占領期インドネシア年表』インドネシア史研究会、p. 109。

⁴⁵ 早稲田大学大隈記念社会科学研究所編。1959。『インドネシアにおける日本軍政研究』紀伊国屋書店。pp. 383-385。

⁴⁶ 「現地民職員人事事務提要」爪哇軍政監部編・倉沢愛子編解題。1994。『ジャワ軍政規定集 [1]』。龍溪書舎。p. 29。

⁴⁷ 同書、p. 108。

⁴⁸ Sutherland, Heather. 1968. "Pudjangga Baru: Aspects of Indonesian Intellectual Life in the 1930s," *Indonesia*, Ithaca: Cornell University, No. 6, pp. 115-116.

た作家が多く就任した。啓民文化指導所は年刊誌『クブダヤアン・ティムール (Koeboedayaan Timoer, 東洋文化)』を1945年の日本の敗戦までに3号刊行したが、そこに掲載されている論考や文学作品の著者は、バライ・プスタカの総合誌『パンジ・プスタカ (Pandji Pustaka, 図書の旗)』でも執筆している場合が少なからずある。『クブダヤアン・ティムール』を単に日本の宣伝誌と解釈するだけでなく、その制作の過程でインドネシア人と日本人の文化人の間にどのような関係が織りなされたのかを明らかにすることが、当時、そしてその後の両者の活動を理解するうえで重要であると考え⁴⁹。また、その過程で執筆された作品の中には、検閲を恐れてインドネシアが独立を勝ち取ってから発表されたものがあることも忘れてはならない。

(2) 印刷・流通・読み手

日本侵攻時、ジャワにあった製紙工場は即座に稼働させることができなかったため、オランダ植民地時代の在庫の紙を利用した。その後、王子製紙がジャワに赴き、製紙工場の稼働を担当した。それ以外の地域では十分な紙が確保できずに、ジャワから融通してもらう話も出た。しかし、海軍管轄の地域への輸送手続きは容易ではなく、断念しなければならなかった。ジャワでも次第に紙不足が深刻になり、占領末期に王子製紙が軍の委託を受けてジャワのカウリングに工場を建設する計画が策定されたが、工事は完成を待たずに敗戦を迎えた⁵⁰。その間、手すき紙を生産して紙不足を凌ぐこととなった⁵¹。

印刷工場については、官報を中心とした刊行物は、オランダ植民地時代の民間のコルフ書店 (G. J. Kolff & Co.) の印刷工場がジャカルタ印刷工場 (または、軍政監部管理印刷工場ジャカルタ) と改名して、ジャワで刊行された学校教科書の一部も含めて印刷を行った⁵²。同印刷工場は、さらにジャワ、マラヤ、ビルマ、シンガポールの軍票、タイの紙幣、はがき、切手などを印刷した。当初は朝日新聞社印刷部員が管理していたが、1942年9月5日から凸版印刷会社が陸軍省整備局から委託を受け、図案、製版、活版、グラビア、製袋、製本、証券などの熟練者39名をジャワへ派遣した。それに伴い、東洋インキから印刷インキ製造のため3名が参加した。1943年12月には、凸版印刷はコルフのバンドン、スラバヤ、マランの印刷工場の委託も受けた⁵³。オランダ植民地時代の政府印刷工場 (ランズドゥルックレイ, Landsdrukkerij) は第一印刷工場と名称を変更して、オランダ植民地時代と同様に学校教科書の大半を印刷した。また、前述したようにバライ・プスタカ (国民図書館) は自前の印刷工場を所有していたため、文教班から依頼された教科書の印刷を行った⁵⁴。

『KAN PO』は、軍政監部の掲示板に貼られた日本語正文がインドネシア語に翻訳されて、初期においてはインドネシア人向けに当時刊行された新聞や雑誌に適宜掲載された。また、1942年8月25

⁴⁹ この点については、以下を参照。姫本由美子。2011。「日本占領期のインドネシア文学：啓民文化指導所に集まった作家たちの作品」『アジア太平洋研究論集』20号, pp. 1-25.

⁵⁰ 王子製紙株式会社。2001。『王子製紙社史本編』, pp. 69-70。王子製紙は、戦後の1967年1月に海外広葉樹の資源の調査研究とその開発利用を図ることを目的に、海外資源調査委員会を設置した。1969年にインドネシアのスマトラ島に合併会社を設立し、翌年パルプ材を名古屋港に初入荷した。

⁵¹ 谷口五郎。1991。「ジャーナリストとしてみたジャワ軍政」, 前掲書, p. 281.

⁵² ジャワ新聞社。1944。前掲書, p. 140.

⁵³ 凸版印刷株式会社社史編集委員会。1961。『凸版印刷株式会社六拾年史』, pp. 126-127.

⁵⁴ 教科書の表紙の左下には、例えば「国民図書館 No. ●●/B-●●」と印刷されている。これは、出版元は軍政監部関連組織であるが、印刷はバライ・プスタカで行われ、その通し番号が記されていることを示すものである。文教局が出版元となっている教科書の大半は左下に「DHK No. ●●」とある。これは、第一印刷工場で印刷されたものであることを示している。

日から毎月2回に分けて、軍政監部企画課法制班によって編集され刊行された。正確な発行部数は不明であるが、中央の司令官や軍政監が発令したものだけでなく、州レベル、候、特別市レベルのものも含まれていたため、値段がつけられて店頭販売や通信販売され、ジャワ全域に流通した。ジャワではインドネシア語の急速な普及には至っていなかったため、1944年も後半になると、地方語で書かれた『ワルタ●●シュウ (Warta ●● Shuu, 州報)』(以下、『州報』と表記)が作成された。州ごとに20万部印刷され、法規等の村落レベルでの周知徹底が図られた。

次に、軍政監部関連の刊行物の半数以上を占める学校教育及び社会教育関連の教科書について、学校教育用教科書を中心に記したい。

1942年11月20日のインドネシア語日刊紙『Pembangun (プンバンゲン、建設者)』によると、バライ・プスタカは国民学校の教科書34点の印刷を文教局から委託を受けて行っている。そこにあげられたすでに印刷された、あるいは当時印刷中であった教科書は表1の通りである。

1番の『Boekoe Bahasa Nippon (ニッポンゴ)』と8番『Kardi lan Kantjane (善人とその友人)』は、初等国民・国民学校用の教科書である。日本軍政は大東亜共栄圏の一員として活動する人々の育成を重視する方針を取っていたため、オランダの植民地時代と比較して生徒数は増加し、初等国民学校の生徒数は約180万人と推定される⁵⁵。1番の日本語の教科書は、生徒4～8人に対して1冊の割合で配布された、と文教局の報告書は記している⁵⁶。300,000万部印刷されたことから、その記述は概ね正しいと考えられる。8番のジャワ語の教科書も265,000部印刷されているので、日本語の教科書と同程度の割合で生徒にわたったと考えられる。教科書の印刷部数から判断しても、国民学校において日本語と地方語の読み書きに重点がおかれた。その他の教科の教科書は、印刷部数が10分の1やそれ以下である。教師にだけ教科書が配布され、日本語以外には新しい教科書が配布されなかったという証言は⁵⁷、この部数の少なさによって裏付けることができる。ただし、67,500部が印刷された2番の『Matahari Terbit

表1 1942年中にバライ・プスタカが作成または印刷した教科書の一部

	出版元*	KP No.	本の題目	印刷部数
1	大日本軍	1082	Boekoe Bahasa Nippon (ニッポンゴ) [マキニ]	300,000
2	BP	?	Matahari Terbit (日の出) [インドネシア語読本]	67,500
3	KP	204	Peladjaran Bahasa Indonesia (インドネシア語教科)	13,000
4	BP	401	Pem. Pel Ilmoe Boemi (地理学)	16,000
5	KP	501	Petoendjoek oentoek mengadakan Ilmoe Kesehatan (保健学教則本)	?
6	KP	511	Ilmoe Kesehatan (保健学)	36,000
7	BP	601-3	Tjara menggambar (絵画法)	11,800
8	KP	1304	Kardi lan Kantjane (善人とその友人) [ジャワ語読本]	265,000

Bertjakapan Dengan Toean K. ST. Pamoentjak: Kokumin Tosjokjokoe (Pembangun 20 November 2602 [皇紀] (1942) とインドネシア国立図書館目録を基に筆者が作成

* KP は Kantor Pengajaran (文教班), BP は Balai Pustaka (バライ・プスタカ) を示す。

⁵⁵ 倉沢愛子. 1992. 前掲書, p. 363.

⁵⁶ 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題. 1991. 前掲書, p. 22.

⁵⁷ 倉沢愛子. 1990. 前掲書, p. 197.

『日の出』(1巻から4巻が1942年に刊行)は、2巻と4巻については翌年に第2刷が刊行されていることが確認できた⁵⁸。したがって、その後も増刷が続けられて授業で使われたと考えられる。

また、教科書は無料で配布された。オランダ植民地時代には、1876年からオランダ植民地政府による学校用教科書の通信販売が行われていたことと比較すると⁵⁹、生徒数の増加と相まってより多くの生徒が教科書を目にすることができたことは否定できない。

就学人数の増加比率については、それを扱った論文等によってばらつきがある。教師の人数については、大幅に増加したと記されたものもあれば、減少したと記しているものもある。大幅に増加したとするものは、おそらく日本から派遣された、あるいは日本軍政がジャワで日本語を教えるために養成した教師の人数を含めているためではないか、と考える。減少したとするものは、オランダ植民地時代のオランダ人を含めた多くの教師が新しい環境に不適應となった一方、彼らに代わる人材を補充できなかったことをその理由としてあげている⁶⁰。一度に一定以上の質を備えた教師を確保することはできない。また、生徒や学校数が増加し、これまでオランダ語で教育を受けてきた生徒が国民学校の生徒と一緒にインドネシア語で学ぶことになったにせよ、学校教育を受けられる経済的に豊かな家庭の子弟という点ではあまり変わらない。ジャワ全体の人口を分母とした学校や生徒の増加率を考えれば、それによってジャワの人々の識字率が3年半の短期間に大幅に上昇したと理解することは慎重であるべきであろう。地方語による『州報』などの刊行物が1944年の時点でも必要とされたことが、それを物語っている。また、子供を学校に通わせる経済的余裕が生まれた家庭も急増したとは考えにくいことから、日本占領期における識字率の急上昇はなかったのではないかと推察される。

以上、ジャワにおいて軍政監部が刊行した刊行物の特徴を日本の占領政策との関係を踏まえて明らかにした。それらから日本の占領期について、次のような特徴が指摘できると考える。

第1に、ジャワで日本軍政が占領統治を行うにあたって、日本政府の方針が矛盾を孕んでいたため、その統治政策も矛盾を抱えざるを得なかった。しかも、日本政府の占領統治、すなわち「大東亜共栄圏」建設にあたって基本方針が出されたのは、占領後2か月以上が経過して出されたため、占領初期は特に混乱状態であった。すなわち、一方で欧米教育の是正、欧米優越観念の排除を主張しながら、他方で「大東亜共栄圏」の建設にあたっては、日本を中心としながらも「東西文化ヲ摂取醇化」する必要性が認識されていた。そのため、インドネシアの占領当初から少数ではあったが高い西洋教育を受けた在インドネシアのオランダ人や印欧混血人の扱いに苦慮した。オランダ植民地時代に開設された多くの研究機関を接収し、そこに蓄積されてきた「知」とそれを担ってきたオランダ人等に依存せざるを得なかった。「アジアの欧米植民地支配からの解放」を唱えるのであれば、欧米が支配していた「知」からの解放も試みるべきであった。その根拠となりうるものは、後世にエドワード・サイードが唱えたオリエンタリズムからの脱却、すなわちアジア人が主体的に「知」を構築することだったのである。それを、のちにインドネシア独立闘争に加わって病死した吉住留五郎が分かりやすい言葉で1945年1月号の『新ジャワ』で発言している。彼は、「南洋通というものは、インドネシア

⁵⁸ 乾千代. 1998. 前掲論文, p. 227. *Preliminary Checklist of Indonesian Imprints During the Japanese Period* の13ページを参照。なお、同書はオランダ植民地時代に刊行されたものを、ほとんど改訂せずに刊行したものである。翌年の増刷部数は不明。

⁵⁹ Moriyama, Mikihiro. 2005. *Sundanese Print Culture and Modernity in 19th Century West Java*, Singapore University Press, p. 86.

⁶⁰ Pane, Sanoesi. 1946. *The Voice of Free Indonesia* No. 17, May 18, p. 12.

人の感情からものを考えられる人間、同時に日本人の感情からものを考えられる人間⁶¹」と語った。そのような南洋通であった日本人がどれほど存在したか、を問題にすべきであろう。

第2に、第1とも関連するが、日本が掲げた占領統治政策はインドネシア社会の現状を無視して実施することができなかった。学校教育用の教科書作成においては、地方語やオランダ語で書かれたものからオランダ色を排除してインドネシア語による教科書を短期間で作成したため、杜撰な教科書作りが行われた。また、日本語が浸透するまでインドネシア語も公用語とすることとしたが、結局国民学校では地方語による授業、そして地方語の授業科目を設けざるを得なかった。しかも日本語と地方語の授業時間の合計がインドネシア語の授業時間の3倍近くにおよび、インドネシア語の授業は後回しにされた。日本語が少し分かるようになったとはいっても、それが独立後に「国民的出版語」となるわけではなく、逆に役に立たない言語となった。また、インドネシア語については、先の吉住留五郎が「スンダ人やジャワ人にとっては、インドネシア語は依然として外国語の状態であり、更に最近盛んに新語が織り込まれているので、一般にはどうしても解りにくい⁶²」と語っている。確かに、教科書等のインドネシア語への翻訳作業の過程で、宣伝班（当時は情報部に名称が変更）の市来竜夫が文教班に設立を強く働きかけ⁶³、文教班長であった森亮太郎が委員長となって1942年10月20日にインドネシア語整備委員会（Komisi oentoeke Menyempoernakan Bahasa Indonesia）が設立され、文教班の予算がつけられた。しかし、インドネシア語が「国民的出版語」としての役割を果たすようになるのはインドネシアが独立闘争に勝利し、占領・戦争状況から脱した1950年代以降に教育制度が整備されてからである。国民語や識字率を軸としたインドネシア社会の分断は、依然大きなものがあったと言える。

第3に、したがって1943年半ばになって学校教育や社会教育において導入された錬成教育で写真を多用した教科書は当時のインドネシア社会により大きな影響力を持ったと考える。それは、インドネシアの人々の体に規律を叩き込ませ、日本敗戦後の独立闘争において役割を果たした。

3. バライ・プスタカ

(1) オランダ植民地時代

オランダの植民地時代の1917年に設立されたバライ・プスタカは、1900年代初頭から実施された倫理政策に対応して、インドネシア人に対する良質の図書を提供することを目的として1908年にオランダ植民地政府の教育宗教省（Department van Onderwijs en Eeredienst）が設立した「原住民学校、および住民の図書のための委員会（Kantoor voor de Inlandsche school- en Volkslectuur）」を前身とする官営の機関であった。そこで、日本占領期のバライ・プスタカの刊行物を分析するまえに、最初にオランダ植民地時代の活動を概観したい。

「原住民学校、および住民の図書のための委員会」は、教育宗教省の依頼を受けた原住民問題顧問官（Adviser voor Inlandsche Zaken）G. A. J. ハゼウ（G.A.J. Hazeu）によって組織され、彼を委員長にバンドンの原住民教育の視学官であった G. J. F. ビーグマン（G. J. F. Biegun），バタヴィアでジャ

⁶¹ 市来竜夫・吉住留五郎対談会、1945。「インドネシアを語る」『新ジャワ』ジャワ新聞社、1号、pp.10-11.

⁶² 同対談会、p.17.

⁶³ 『新ジャワ』第1巻第2号、1944年11月号、p.11.

ワ語の教師を務めていた D. ファン・ヒンルーベン (D. van Hinloopen)⁶⁴, 同じくバタヴィアでマレー語の教師をしていたイスラームの専門家 Ph. S. ファン・ロンケル (Ph. S. van Ronkel), およびポイテンゾルグの原住民農業副視学官であった H. C. H. ビー (H. C. H. Bie) が委員に任命された。植民地東インド (インドネシア) の社会・文化に精通したオランダ人学者たちであった。当初の主な活動は、教育宗教省が原住民学校の生徒および一般の人々に提供する図書の選定に対して助言を行うことであった。ライデン大学で東洋文学の博士号を取得した D. A. リンケス (D. A. Rinkes) が 1910 年に事務局長として加わった。彼は、ハゼウの下で原住民問題顧問事務所でも働き、1913 年のハゼウのオランダ帰国に伴い原住民問題顧問官となり、さらに「原住民学校、および住民の図書のための委員会」の委員長となった。しかし、ハゼウが東インドに戻り原住民問題顧問官に再任されたため、「原住民学校、および住民の図書のための委員会」から独立した、リンケスが率いる「バライ・プスタカ」が原住民問題顧問事務所のサブ・ユニットとして 1917 年に設立された。1927 年にリンケスが退官後、T. J. レッケルケルケル (T. J. Lekkerkerker) が所長に、続いて J. ドウレウェス (J. Drewes), そしてヒディング (Hidding) が後継者となった⁶⁵。これら歴代の所長は、東インドについて、各々によって専門分野は異なったが優れた学識を備えたオランダ人であった。

D. A. リンケスに率いられたバライ・プスタカの活動は、東インドの知識人層に西洋文明の知識を提供し、東インドを発展に導くことであった。それはまた、オランダ植民地政府の植民地経営にとって「安全」な図書を提供すること、すなわち有害な図書を排除することと表裏一体であった。委員会から独立したことは教育宗教省からも独立した存在となったことを意味し、したがって学校教科書には関与せず、また自らの印刷所を持つこととなった。

バライ・プスタカには編集部、翻訳部、新聞部、印刷所、図書取次、書店、会計、読書室の 8 部署が置かれた。

編集部は、ジャワ語、スندا語、マレー語等のセクションに分かれ、各言語の図書と総合雑誌であるジャワ語の『クジャウエン (Kedjawen)』、スندا語の『パラヒアガン (Parahyangan)』、マレー語の『スリ・プスタカ (Sri Pustaka)』と『パンジ・プスタカ』を刊行した。1920 年のバライ・プスタカの出版図書カタログによると、ジャワ語の本約 200 冊、スندا語の本約 100 冊、マレー語の本 80 冊、マドゥラ語の本 40 冊が刊行された⁶⁶。マレー語の本は、ジャワ語やスندا語のものより少なかったが、1930 年代には他の言語の出版点数を追い越して、もっとも多くなった⁶⁷。マレー語の本が増加した背景には、複数の地方語による図書を刊行する煩雑さを軽減するために、マレー語を用いようとするオランダ側の意図が働いていた。各地域の伝統文学や民話の収集と編纂、各地の民話等の刊行に加え、インドネシア人作家の文学作品をより多く刊行するようになった。

翻訳部では、西洋近代文学の翻訳が行われた。また、娯楽要素の高い読み物や日常生活に役立つ実用書等も翻訳された。これらの翻訳原稿は、編集部でチェックされ、必要に応じて書き換えられた。さらに、D. A. リンケスは、バライ・プスタカが刊行する図書の統制を行っただけでなく、新聞部を

⁶⁴ D. ファン・ヒンルーベンは、神智学協会のオランダ領東インド支部長を、その後の 1912 年から 23 年まで務めた。

⁶⁵ Jedamski, Doris. 1992. "Balai Pustaka: A Colonial Wolf in Sheep's Clothing," *Archipel*, Volume 44, pp. 23-46.

⁶⁶ Quinn, George. 1992. *The Novel in Javanese: Aspects of Its Social and Literary Character*, Leiden: KITLV Press, p. 20.

⁶⁷ Aeusrivongse, Nidhi. 1976. *Fiction as History: A Study of Pre-War Indonesian Novels (1929-1942)*, Ph. D. dissertation, the University of Michigan, pp. 31-34.

設置して現地新聞の調査 (Inlandsche Persoverzicht, 以下 IPO) を行い、マレー語と華人系マレー語の新聞統制を行った⁶⁸。

最後に図書の取次と読書室について触れたい。バライ・プスタカから刊行された図書は、政府の学校図書取次保管所 (Depot van Leermiddelen) が販売を行っていたが、倉庫に眠ってしまうことが多かった。そこで取次代理店のネットワークを作り販売を促進した。1925 年には、そのような代理店が 58 店となり、販売が促進された。代理店のない僻地では、郵便局がカタログによって取り次ぐ方法も講ぜられた⁶⁹。また、高値で転売されないように定価がつけられた⁷⁰。1917-1922 年の間にのべ 108 万部が売られた⁷¹。

そして D. A. リンケスが初期の段階から最も力を入れたのが、読書室の設置である⁷²。地方語を教授用語とする 2 級小学校 (5 年制) を中心にその地域で用いられている地方語とマレー語で書かれた図書が設置された。オランダ語原住民学校 (H.I.S.) ではオランダ語で書かれた本が置かれた。その数は、1930 年末には 3,000 室に達した。しかし、これらの読書室はジャワとスマトラに集中していた。さらに、病院、兵舎内等にも読書室が設けられることもあった。読書室の利用者数は、東インド全体で 1930 年末には延べ 40 万人に達した⁷³。バライ・プスタカの図書は、自動車に満載されて巡回図書館として、読書室のない地域にも届けられた⁷⁴。

しかし、1930 年代に入るとバライ・プスタカは活力を失っていく。活動収支の大幅な赤字に加え、世界恐慌の影響により予算が縮小された。また、倫理政策下に西洋教育を受けたインドネシア知識人を中心とした民族主義運動が徐々に高まりを見せ、1926 年には共産党蜂起が発生したことなどにより、オランダ植民地政府の倫理政策は後退していった。

一方、バライ・プスタカではインドネシア人作家も働き、作品を発表する場を与えられていた。その作家たちのマレー語の性格が、1920 年代末から 1930 年代にかけて、より現代のインドネシア語に近いものとなっていった。その背景に、マレー語の執筆において非常に高い能力を備えた作家たちがバライ・プスタカのマレー語担当の編集ポストを歴任したこと、そして作家たちも師範学校の卒業生やそこで教師として経験を積んだ者たち、あるいはジャーナリズムの世界に身を置いた経験のある者たちが中心となったことがある⁷⁵。例えば、1929 年にマレー語の総合誌『パンジ・プスタカ』の編集長の募集が行われ、アディ・ヌゴロが採用された。彼は、ヨーロッパ留学中にオランダ領東インドの数紙の新聞と『パンジ・プスタカ』の特派員を務めていた。帰国後に『パンジ・プスタカ』の編集者となったが、1931 年にはメダンで発行されていた『プワルタ・デリ (Pewarta Deli)』へ転職した。1929 年の募集時にはタクディル・アリシャバナも応募したが採用されなかったため、パレンバンで教職に就いた後、1931 年にバタヴィアに戻りバライ・プスタカのマレー語図書の編集を担当するこ

⁶⁸ IPO については以下を参照。Yamamoto, Nobuto. 1995. "Colonial Surveillance and 'Public Opinion': The Rise and Decline of Balai Poestaka's Pree Monitoring," *Keio Journal of Politics* 8, pp. 71-100.

⁶⁹ 中村孝志. 1942. 「蘭領東印度の文化施設」『国際文化』18 号, pp. 57-58.

⁷⁰ Jedamski, Doris. 1992. *Op.Cit.*, p. 28.

⁷¹ Aeusrivongse, Nidhi. 1976. *Op.Cit.*, p. 43.

⁷² Jedamski, Doris. 1992. *Op. Cit.*, p. 27.

⁷³ Aeusrivongse, Nidhi. 1976. *Op.Cit.*, pp. 43-46.

⁷⁴ Jedamski, Doris. 1992. *Op.Cit.*, pp. 8-9.

⁷⁵ Aeusrivongse, Nidhi. 1976. *Op.Cit.*, p. 31.

ととなった⁷⁶。アルメイン・パネは1936年からマレー語とマレー語訳の本の編集を担当し、サヌシ・パネは1941年にバライ・プスタカのマレー語図書の編集担当に就任した⁷⁷。これらのインドネシア人は、すべてスマトラ出身者で、しかも作家としてすでに一定の実績があった。また、バライ・プスタカを短期間で去ったアディ・ネゴロを除いて⁷⁸、日本軍がバタヴィアへ侵攻する1942年3月までバライ・プスタカに在籍していた。

このように、バライ・プスタカで働くようになったマレー語文学で頭角を現してきた作家たちは、必ずしもバライ・プスタカに全面的に期待を寄せていたわけではない。それを示す動きは、1933年にタクディル・アリシャバナ、アルメイン・パネ、そしてアミル・ハムザ（Amir Hamza, 1911-1946）が文芸誌『ブジャンガ・バル（*Budjangga Baru*, 新文人）』をバタヴィアで創刊したことに現れている。アルメイン・パネの兄であるサヌシ・パネは、1933年にはバンドンの国民学校で教えていたため直接創刊には加わらなかったが、同誌をいち早く支持し、その後多くの論考を寄稿した。

彼らは、バライ・プスタカがヒカヤット（*hikayat*, マレー語古典文学のなかの史伝および物語）やシャイール（*syair*, マレー語古典文学の中の韻文の一形式、いわば韻文のヒカヤット）に重きを置いていたのに対し、「新しい環境の下でインドネシア人がヒカヤットやシャイールの形式の中で思考し感じることはばかげたことである」とアルメイン・パネが主張したように、新しい文学の伝統を確立すること、そしてそれによってインドネシア文化が統一されることを目指した⁷⁹。

『ブジャンガ・バル』の創刊時タクディル・アリシャバナは、バライ・プスタカにすでに奉職していた。またアルメイン・パネは、バタヴィアのタマン・シスワの中等学校で教師をしていたが、1936年にバライ・プスタカで働き始めた。彼の代表作の一つ『ブルング（*Belunggu*, 軼）』を1938年にバライ・プスタカから刊行しようとしたが、オランダ人側に掲載を拒否され、結局『ブジャンガ・バル』に1940年から連載小説として発表した。バライ・プスタカの所長等のオランダ人は、政府にとって好ましくない作品に対し、内容を書き直させたり、掲載を拒否したりした。しかし、アルメイン・パネはそのままバライ・プスタカにとどまっている。『ブジャンガ・バル』のもう一人の創刊者アミル・ハムザはスマトラのランカット王家の跡取りとして1937年に故郷に戻った⁸⁰。

では、タクディル・アリシャバナ、そしてパネ兄弟がバライ・プスタカで働き続けた理由は何であろうか。インドネシア文学研究の第一人者であったA. テウ（A. Teeuw）は、当時のバライ・プスタカの長所を次のように説明する。1926年の共産党蜂起以降、オランダ植民地政府は出版物の検閲を厳しくし、表現の自由が制限される中で、バライ・プスタカは官営の機関としての特権を与えられ、近代文学の育成を担うことができた。すなわち、作家たちは納得のいく謝金を得ることができ、しかもその支払いは迅速であった。そして彼らの作品は、バライ・プスタカの読書室と販売網を通して多くの読者を獲得することができた⁸¹。その環境の中でインドネシア人作家は、作品執筆、編集、そし

⁷⁶ Jassin, H. B. 1967. *Kesusastraan Indonesia Modern dalam Kritik dan Esei I*, Tjetakan Ke-empat, Djakarta; Penerbit P. T. Gunung Agung, p. 79. (初版は1954年)。

⁷⁷ *Ibid.*, p. 108.

⁷⁸ アディ・ネゴロは、日本占領期にスマトラのメダンで刊行されたインドネシア語日刊紙『北スマトラ新聞』の主幹となり、またスマトラで1943年1月に設立されたインドネシア語研究所（*Lembaga Bahasa Indonesia*）のメンバーとなった。

⁷⁹ Aeusrivongse, Nidhi. 1976. *Op.Cit.*, pp. 66-67.

⁸⁰ アミル・ハムザは日本占領期に前述のインドネシア語研究所のメンバーとなった。

⁸¹ Teeuw, A. 1972. "The Impact of Balai Pustaka on Modern Indonesian Literature," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 35-1, pp. 120-121.

て出版経営についての経験を積み、その後の活動の展開につなげることができた、とする。彼らは、バライ・プスタカの統制に不満を持っていたが、A. テウの指摘した利点を得るために在籍した。一方、そこから自由な立場の『プジャンガ・バル』誌上で、自分たちが目指す文学活動を行った。

(2) 日本占領下のバライ・プスタカ

A. 活動の再開

バライ・プスタカは、日本のジャワ侵攻によって閉鎖されていたが、陸軍の囑託として主に宣伝班で活動していた市来竜夫が、同班によるインドネシア語日刊紙『アジア・ラヤ (Asia Raya, 大アジア)』の創刊準備に携わりながらも、バライ・プスタカの再開に奔走した。1942年4月11日にはアルメイ・パネを編集長としてインドネシア語の総合誌『パンジ・プスタカ』が復刊した。市来は、それに続いて4月29日に創刊された『アジア・ラヤ』の編集委員長にもなったが、その編集室にはほとんど顔を出さずに、自身の主な活動の場をバライ・プスタカにおいた⁸²。

宣伝班の中心メンバーの一人であった徴用作家富沢有為男は、『アジア・ラヤ』の発行に専念しており、バライ・プスタカへの目配せは不十分であった。また、同じく徴用作家の浅野晃は、バライ・プスタカのインドネシア語辞典編纂作業に、日本の近代化過程での経験を重ね合わせ、共感の念を懷いたことを書き残している。

市来竜夫の尽力によって6月23日には正式に事務所が再開した⁸³。バライ・プスタカの所長には、戦前からバライ・プスタカに籍を置いていた作家カスマ・スタン・パムンチャク (Kasuma Sutan Pamuntjak, 1886年生) が就任した⁸⁴。『パンジ・プスタカ』の編集長はアルメイ・パネ、翻訳部長はタクディル・アリシャバナ、図書部長はサヌシ・パネと、日本占領期以前のバライ・プスタカとほぼ同じ陣容となった。



写真 1. 左からバライ・プスタカ所長の St. パムンチャク、宣伝班の中谷義男、富沢有為男、市来竜夫、S. アラタス。(『パンジ・プスタカ』2602(1942)年7月25日刊行の16号より)

⁸² *Pembangun*, 20 November 2602 [皇紀] (1942).; 中谷義男. 1956. 「中谷義雄談話 軍政の思い出」1956年11月20日。(西嶋コレクション JV 34-2, 早稲田大学所蔵)。

⁸³ *Asia Raya*, 25 Djoeni 2602 [皇紀] (1942). *Pandji Poesoetaka*, 16 Mei 1942 No. 6, p. 23.

⁸⁴ *Gunseikanbu*. 2604 [皇紀] (1944). *Orang Indonesia Jang Terkemoeke di Djawa*, p. 287.

大きな変化は、オランダ植民地時代に東インドの専門家として同社会や文化を長年研究していたオランダ人に代わり、インドネシア語やその社会についてほとんど知識のない日本陸軍第16軍の宣伝班の監督下に置かれたことである。その後、文教班の監督下へと移り、同班がバライ・プスタカの活動費も負担した⁸⁵。当初バライ・プスタカで存在感を示していた、戦前からインドネシアについてよく知り理解があった市来竜夫が内地からの文部官僚にとって代わられた。前述した通り、文教班の班長は元銀行員の森亮太郎、そして農学を専門とした文部省官僚の尾崎卓郎であり、彼らのインドネシア社会・文化への造詣の深さはオランダ植民地時代のオランダ人所長たちの足元には全く及ばなかった。日本占領期にインドネシア人は、自分たちの風俗習慣に精通していた日本人を「トアン・ジャパン」、そうでない日本人を「トアン・ニッポン」と呼んで区別していた⁸⁶。市来竜夫は前者で、森や尾崎は後者であった、と言える。1943年の文教局予算に占めるバライ・プスタカの予算は、博物館および仏跡維持費よりは多かったが、全体の2パーセント強に過ぎなかった⁸⁷。翻訳部があり、自前の印刷所を備えていたバライ・プスタカは、文教局にとっては学校用教科書作成の補助的役割を期待する程度の存在であり、インドネシア人側にとっては、オランダ人が所長であった時と比較して、市来竜夫の当初の存在が後ろ盾となって自分たちがより主体的に活動できる、と考えたであろう。1942年11月20日の『ブンバンゲン』の記事には、「バライ・プスタカはオランダ植民地時代にはオランダ人によって指導されていたが、現在はインドネシア人の指導の下に活動が行われている」と記されている。まったく事実と反するものではなかった。

1942年6月のバライ・プスタカの正式の再開に先立って4月11日に復刊した『パンジ・プスタカ』には、復刊にあたっての巻頭言「道を切り開くもの」が掲載された。

これまでの私たちの精神は、西洋の世界に縛られてきた。私たちのすべての行動、思考経路と精神は西洋の領域内を廻っていたため、東アジアは非常に遠いアジアであると認識してきたが、東洋こそ私たちに最も近く、しかもそこには私たちと同族同祖の人たちが住んでいるのだ。私たちが、東アジアを遠いと話してきたことは、西洋人にとってはまさにそうであったのであり、したがって彼らがそのように話してきたからである。(中略)

西洋人によってこれまで設定されていた境界は、もはや私たちアジアの兄弟が手を取り合うことを阻止することはできない。その西洋世界に対する私たちのあこがれを今すべてにおいて、大アジアの文化精神、繁栄、尺度へと方向転換する。私たちのインドネシア的なものを大アジアに対して示すことは、私たちの崇高なる義務である⁸⁸。

この巻頭言のさわりは、これまで西洋中心で展開していた世界を大アジアに転換すると主張した。しかし、最後の一行からは決してその大アジアの中でインドネシア的なものが埋没してしまうのではなく、大アジアの世界観を考える上で、インドネシア的なものを積極的に提示することの重要性を認識していたことが了解できる。しかも、日本文化を中心に「大東亜共栄圏」文化を築くことを謳ってきた日本の主張とは

⁸⁵ *Pembangun*, 20 November 1942 [皇紀] (1942).

⁸⁶ 市来竜夫・吉住留五郎対談会。1945。前掲誌。p. 12。「トアン」は旦那様という意味のインドネシア語である。

⁸⁷ 「昭和十八年度文教関係予算」(爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題。) 1991。前掲書。pp. 116-117。

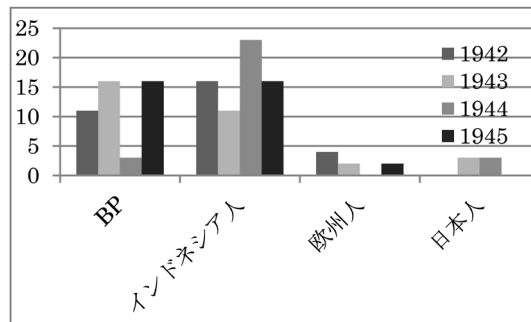
⁸⁸ “Pamboeka Djalan” *Pandji Poestaka*, 11 April 1942, No. 1, p. 1.

異なり、「大アジア」という表現こそ巻頭言では用いられているが、「日本」という言葉は一度も出てこない。

そこで次節では、日本占領期のバライ・プスタカの活動を理解する一環として、バライ・プスタカが刊行した図書を取り上げて、その特徴を明らかにしたい。本稿が手掛かりとしている『インドネシア国立図書館目録』には、バライ・プスタカ刊行の図書が約 100 点掲載されている。バライ・プスタカはインドネシア独立後も存続したため、日本占領期という時限を超えて、次の時代にも読み継がれていったものもある。

B. 刊行図書の特徴―書き手と内容

インドネシア国立図書館目録を基に日本占領期にバライ・プスタカから刊行された図書の書き手別件数を示したものがグラフ 3 である。軍政監部の刊行物と同様、バライ・プスタカという機関名が書き手となって刊行されているものが多い。しかし、軍政監部の刊行物と異なり、それ以上に書き手としてインドネシア人の名前が記された図書が多い。前出のグラフ 1 が示す通り、日本の敗戦までの 3 年半にバライ・プスタカから約 100 点の図書が刊行された。それらをバライ・プスタカの図書番号順に一覧表としてまとめたものが表 2 である。



グラフ 3 バライ・プスタカ刊行図書の書き手

日本占領期に初版として最初に刊行された本は、17 番のバライ・プスタカ番号 No.1450 の図書であろう。それ以前の番号のものは、日本軍侵攻前の 1942 年以前に刊行された図書の再版（増刷）であり、その中の初版となっている No.1414 と No.1446 も再版の可能性が高い。No.1450 から No.1588 まだが日本占領期の初版本、と考えられる。したがって、通し番号に基づくと実際は 138 点が初版として刊行されたことになる。しかし、その中には日本占領期以前にマレー語で刊行されたものをジャワ語やスندا語に翻訳されたものや、日本占領期にインドネシア語、ジャワ語、スندا語の 3 つの言葉で刊行されたものもあり、初版本の点数は実際にはそれより少ないと考えてよい。また、前述したように、17 番より前の 16 点は、初版が日本占領期以前に刊行された。すなわち、日本占領期に刊行されたバライ・プスタカの図書の少なくとも 2 割は、それ以前に刊行された図書の再版であった。

では、初版本の内容にはどのような特徴が認められるのであろうか。

第 1 に、礼儀作法、鶏の飼育法、養蜂、医療や薬、等についての実用書が多いことである。それらの実用書は、オランダ植民地時代のものと大差はない⁸⁹。しかも、この種の本はインドネシア語だけではなく、

⁸⁹ 例えば、1921 年にバライ・プスタカから刊行された本の裏表紙のマレー語の図書の広告から同じ傾向がうかがえる。

表2 日本占領期にバライ・プスタカから刊行された図書リスト (1942-1945)

	BP No. (刊行年：皇紀)	本の題目 (日本語訳)／初版でない場合の版／ 地方語の場合	著者／『ブンバンガン』記事から／ [] は筆者による補足説明
1	48 (2602)	Hikajat Pandji Semirang (スミラン王伝) 第6版	古文書／[初版は1917年]
2	332 (2605)	Dari hal mentjari kesehatan (健康への手引きから) 第2版	Sardjito, Mas／[初版は1930年]
3	533 (2602)	Si Samin (サミンちゃん) 第3版	Kasim, Moehammad
4	1196 (2602)	Sepoeloeh Tjerita kanak-kanak (10の童話) 第3版	Madjoindo, Aman Datuk／[1935年に発表された著者による童話]
5	1232a-d (2604)	Pelangi (虹)	Alisjahbana, Soetan Takdir／[初版は1932年]
6	1283 (2604)	Katjang tanah (落花生) 第2版	Sanif, Sutan
7	1298 (2603)	Oebi kajoe (キャッサバ) 第2版	Sunif, Sutan
8	1306 (2604)	Nangkarake wedoes (ヤギの飼育) ジャワ語 第2版	Soetiksna, S.P.／[初版は1938年]
9	1308 (2604)	Dadi bijoeng (母になる) ジャワ語第3版	Reksawardaja, Wasir 編／[初版は1941年]
10	1329 (2604)	Djagoeng (トウモロコシ) 第2版	Sanif, Sutan
11	1360 (1942)	Kleermaker modern (Saringan dari system Perantjis dan Amerika) Menggoenting djas dan tjelana (スーツの近代的裁断・仕立て：フランスとアメリカ製法の精選集) 第2版	Hermani, R. S.
12	1380 (2602)	Berbagai Perluhan Kaoem Isteri (主婦の様々な必需品) 第2版	Toemengoeng Ch.,Sj. Dt. 版／刷り上がり間近のため、注文を受け付け中。／[第1版は、1940年、1944年に第3版]
13	1394 (2605)	Oebi djalar (サツマイモ) 第2版	Sanif, Sutan
14	1414 (1942)	Sinbad : petikan saking tjarios 1001 daloe (シンドバッド：千一夜物語から) ジャワ語	Winter, C.F. ジャワ語訳
15	1428 (2605)	Pentjak (ブンチャック) 第2版	Soegoro・Saksono／[初版は1941年]
16	1446 (2603)	Kawi-djarwa (古ジャワ語現代ジャワ語)	Poerwadarminata. W. J. S.
17	1450 (2602)	Baoesastra Mlajoe-Djawi (マレー語ジャワ語辞典) ジャワ語	Poerwadarminata, Welfridus Joseph Sararaja／[2604(1944)年に第2版、2605(1945)年に拡大版の第3版 Baoesastra Indonesia-Djawi 刊行]
18	1459 (2605)	Mari Kita bernjanji (歌いましょう) 第2版	Soed, Iboe／[インドネシアの歌集]
19	1464 (2602)	Tatatjara (礼儀作法) ジャワ語	Padmasoesastra, Ki／[2604(1944)年に第2版?]
20	1465 (1942)	Sajoer-sajoeran negeri kita (我が国の野菜)	Notowerdjo, Moertedjo, W. De Jong 改訂, N. St. Iskandar マレー語訳。
21	1472 (1942)	Gandroengipoen nata sepoeh (老王の恋) ジャワ語	Boccacio／[『デカメロン』から]
22	1475 (2602)	Setya toehoe ing kakoeng (男性に対する貞操) ジャワ語	Boccacio／[『デカメロン』から]
23	1485 (2602)	Copernicus atau rahasia-rahasia langit (コペルニクスまたは天空の秘密)	Balai Poestaka
24	1490 (2602)	Koempoelan bermatjam-matjam petoendjoek dan resep jang bergoena bagi tiap-tiap orang (処方箋集)	Balai Poestaka／印刷中。金属を精錬し、物に作り替える方法／[1946年に第3版]
25	1491 (1942)	Pitoloeng saheulaanan (応急処置) スンダ語	Djohan, Bahder, Achdiat Karta Mihardja, R. 訳／[1941年に刊行のインドネシア語版 (no.1456) のスンダ語訳]
26	1493 (2602)	Hikajat Kalilah dan Daminah (カリラーとダミラーの歴史物)	Abdoellah Ibnol Moeqaffa (Isma'il Djamil 訳)／アラビア語から翻訳し、印刷中。／[4巻本の第1巻。原典は、サンスクリット語で書かれたインドの説話集 (パンチャタントラ)]
27	1494 (2602)	Pedoman Beternak Ajam (鶏の飼育法)	Mohede, J. F.／[2603(1943)年に第2版。2604(1944)年に第3版。1955年に第6版]
28	1495 (2603)	Ratna : roemah-roemahan (ラトゥナ：人形の家)	Ibsen, Hen. (Armijn Pane 翻案)
29	1500 (刊行年なし)	Sedjarah Indonesia Djilid I Hingga Akhir Madjapahit (インドネシア史第1巻 マジャパヒト終焉まで)	Sanoesi Pane／サヌシ・パネの著作を印刷中／[『バンジ・プスタカ』の記事から1942年刊行が確認できる。1950-1965年の間に7版まで出版]
30	BA No なし (2603)	Sedjarah Indonesia Djilid II Samoedera—±2460 Perdjoeangan dengan Kompeni (インドネシア史 第2巻：サムドゥラー—±1880 東インド会社との闘い)	Sanoesi Pane
31	1500b (2603)	Sedjarah Indonesia Djilid III ±2460—±2530 (インドネシア史 第3巻：±1800—±1870)	Sanoesi Pane
32	1500c (2605)	Sedjarah Indonesia Djilid IV Zaman Pendjadjahan Baroe Hingga Kedatangan Balatentera Dai Nippon (インドネシア史 第4巻 新植民地時代から大日本軍到来まで)	Sanoesi Pane

日本占領下インドネシアで読まれた刊行物

表2 つづき

	BP No. (刊行年：皇紀)	本の題目（日本語訳）／初版でない場合の版／ 地方語の場合	著者／『ブンパンダン』記事から／ [] は筆者による補足説明
33	1501 (2603)	Peladjaran bahasa Melajoe : oentoek sekolah rendah 1 (マレー語教科：低学年用) 第2版	Kantor pengadjaran 文教局 no.204／[2604(1944)年に第3版.]
34	1502 (2603)	Asia Raja dan benoea jang lain-lain (大アジアとその他の大陸)	Kantor Pengadjaran (文教局 no.404)／[2603(1943)年に第2版, 2604 (1944) 年に第3版, 小学校の世界地理の教科書]
35	1504 2603	Peribahasa (ことわざ)	Pamuntjak, Kusuma・Iskandar, Nur Sutan・Madjoindo, Aman Datuk
36	1505 (2603)	Kasoesastraan Soenda I (スンダ文学 I) スンダ語	Kantor Pengadjaran (文教局 no.2143)／[中等学校レベル, 第2巻は文教局 no. 2144]
37	1506 (2603)	Oendak-oesoek Basa Soenda (スンダ語敬語) スンダ語	Satjiadibrata, Raden
38	1510 (2604)	Kasijate kedela (大豆) ジャワ語	Sukmono, R. (マレー語の本からの抜粋)／[マレー語本 Kedelai (Sanif, Soetan 著, 1941 年 刊 行, no.1449)?]／[2604(1944)年に第2版]
39	1512 (2604)	Ketela rambat (サツマイモ) ジャワ語	Sanif, Sutan (Wasir Reksawardaja ジャワ語訳)／no.1394 のジャワ語版]
40	1513 (2604)	Djagoeng (トウモロコシ) ジャワ語	Sanif, Sutan (Wasir Reksawardaja ジャワ語訳)／[no. 1329 のジャワ語版]
41	1514 (2603)	Ketela pohoeng (キャッサバ) ジャワ語	Sanif Sutan (Wasir Reksawardaja ジャワ語訳)／[no. 1298 のジャワ語版, 1944 年に第2版が刊行]
42	1515 (2603)	Katjang pendem (落花生) ジャワ語	Sanif, Sutan (Wasir Reksawardaja ジャワ語訳)／[no.1283 のジャワ語版, 2604 (1944) 年に第2版]
43	1516 (2604)	Gawe saboen (石鹸を作る) ジャワ語 第2版	Shomin Kumiai Chuo Jimusho
44	1517 (2604)	Dongeng-dongeng sasakala 2 巻本	Ambri, Mohammad／[スンダ語の民話]
45	1519 (2603)	“Makanan jang sehat” dan beberapa ichtiar jang lain boeat memelihara kesehatan dan menolong menjemboehkan penjakit (健康食と健康増進・病氣予防に関する諸点) 第2版	Aulia／[第1版は, 1937 年にバトゥサンカル (For van der Capellen) で出版?]
46	1520 (2603)	Oebar kampoeng (村の薬) ジャワ語	Prawiranegara, R. Isis／[2604(1944)年に第2版]
47	1521 (2603)	Tatakrama oerang Soenda (スンダ人の礼儀作法) スンダ語	Sjatjadibrata, R.／[1946 年に第2版]
48	1525 (2604)	Niku-dan, koerban manoesia (肉弾, 犠牲者)	Sakurai, Tadayoshi／[桜井忠温著『肉弾』のインドネシア語版]
49	1526 (2603)	Bertanam kapas di Djawa (ジャワにおける棉栽培)	Ishikawa, Teijiro
50	1527 (2603)	Lalab-lalaban (野菜) ジャワ語	Prawiranegara, R. Isis
51	1528 (2603)	Miara hajam (養鶏) スンダ語	Salmoen, M.A.
52	1529 (2604)	Ngingoe tawon (養蜂) ジャワ語	Soekmono, R.
53	1530 (2604)	Panoelakipoen sesakit ajam (家禽の疾患予防) ジャワ語 第2版	Wirahandaja, S.／[同年に第3版]
54	1531 (2604)	Ndjaga koewarasan (公衆衛生の管理) ジャワ語	Djawa Goenseikanbu
55	1533 (2603)	Nandoer Kapas ing Tanah Djawa (ジャワにおける綿花栽培) ジャワ語	Ishikawa, Teijiro／[no.1526 のジャワ語版]
56	1535 (2603)	Djasa jang ta' diloepakan (怠ってはならない本分)	Djawa Goenseikanbu
57	1536 (2603)	Toeboeh manoesia (人体)	Mochtar, Raden／[2603(1943)年の『バンジ・ブスタカ』に書評掲載, 2605(1945)年に第2版.]
58	1537 (2603)	Kopra (コブラ)	Notowerdojo, Moertedjo／[1946 年に第2版]
59	1538 (2603)	Sampeu (キャッサバ) スンダ語	Sanif, Soetan・Moertedjo・Salmoen によるスンダ語訳.
60	1539 (2604)	Djagong (トウモロコシ) スンダ語	Sanif, Soetan／no.1329 のスンダ語訳
61	1540 (2604)	Kadaharan noe beunang dililakeun (食用可能な食物) スンダ語	Salmoen, M.A.
62	1541 (2603)	Perikanan di sawah (水田での養魚)	Shimizu, S
63	1542 (2603)	Si Giat:Tjerita pengetahuan oentoek anak-anak (子供の教養向け物語)	Edrisy, M. S.
64	1544 (2604)	Bertanam padi (稲作)	Sanif, Sutan
65	1545 (2604)	Hoei Boled (サツマイモ) スンダ語	Sanif, Sutan／[no.1394 のスンダ語版]
66	1548 (2604)	Perintis Djalan (開拓者)	Djawa Goenseikanbu／[2605 年に第2版]
67	1549 (2604)	Nggematosi barang (ものを整理する) ジャワ語	Soekmono (Saleh 編)

表2 つづき

	BP No. (刊行年：皇紀)	本の題目（日本語訳）／初版でない場合の版／ 地方語の場合	著者／『ブンパンダン』記事から／ [] は筆者による補足説明
68	1550 (2604)	Tjinta Tanah Air (祖国を愛する)	Iskandar, Nur Soetan／2605(1945)年に第2版, 1963年に第4版.
69	1551 (2604)	Pangan sing moenpangati (食糧とその利用方法) ジャワ語	Bale Poesoetaka
70	1552 (2604)	Nandoer pari (稲作) ジャワ語	Sanif, Sutan／[no.1544のジャワ語版]
71	1553 (2603)	Nggedekake asli boemi (農産物の増産) ジャワ語	Reksawardaja, Wasir／[2604年に第2版]
72	1557 (2604)	Soeok (落花生) スンダ語	Sanif, Sutan (R. Saban Achmadによるスンダ語訳)／[no.1283のスンダ語版]
73	1558 (2604)	Miara njiroean (養蜂) スンダ語	Satiadiredja, Soeparma ([R.Isis Prawiranegaraによるスンダ語訳]／オランダ植民地時代にC.Versluisから出版された冊子の拡大版?)
74	1559 (2604)	Katjang kedele (大豆) スンダ語	Sanif, Sutan (R. Saban Achmadによるスンダ語訳)／[原本はKedelai (Sanif, Soetan著, 1941年刊行, no.1449)か?]
75	1560 (2604)	Dosa lan Kadjahatane Inggris-Amerikah (英米の罪と悪の歴史) (ジャワ語, ジャワ文字)	no.1563のジャワ語版.
76	1560 (1945)	Sandiware bende Mataram (脚本：マタラムの鐘)	Kotot Soekardi
77	1561 (2604)	Kamoes Soenda-Melajoe (スンダ語マレー語辞典)	Satjadibrata, Raden
78	1562+1592 (1945)	Gajah Mada : pahlawan persatoean Noesantara (ガジャマダ：ヌサンタラを統一した英雄)	Yamin, Muhammad
79	1563 (2604)	Sedjarah Dosa dan Kedjahatan Inggeris dan Amerika (英米の罪と悪の歴史)	M. Kaneko
80	1564 (2604)	Sedjarah Dosa Djeung Kadjahatan Inggris Katoet Amerika Bagian I Inggris (英米の罪と悪の歴史) (スンダ語)	no. 1563のスンダ語版.
81	1565 (2605)	Neoloengi wong katjilakan (災難者救助) ジャワ語	Sukmono, R.
82	1567 (2605)	Adja Lara (病氣予防) ジャワ語	Mochtar, Raden
83	1568 (2604)	Pekarangan (庭)	Sanif, Sutan
84	1569 (2604)	Kamoes leutik Malajoe-Soenda (マレー語スンダ語ポケット辞典) スンダ語	R. Satjadibrata
85	1570 (2604)	Bab ngingah oelam loh ing pasabinan ing Tanah Djawi (ジャワでの水田養魚入門) ジャワ語	Sangyoobu
86	1572 (2605)	Sandiware Chushingura (脚本：忠臣蔵)	Sakae Shioya／(H.B. Jassin・Karim Halim 訳)
87	1573 (2605)	Pedoman bertjotjok tanam (栽培指針)	Tohir, Kaslan Abdullah
88	1574 (2605)	Njioer melambai (ヤシの葉が風に揺れて)	Isobe, Yuji (朝日新聞特派員)
89	1575 (2605)	Palawidja (裏作)	Halim, Karim
90	1576 (2605)	Logat Nippon (日本語の発音)	Gunseikanbu Kokumin Toshokyoku
91	1577 (2605)	Diagnose-kimia dan tafsirkliniknja (科学的診断とその解釈)	Askin Widjaja Kusumah, Djenal／[インドネシア語で出版された初の医学書 (Itagakiの序)]
92	1578 (2605)	Sedikit Tentang Sedjarah Asia Timoer Raja dan Sedjarah Tanah Djawa (大東亜史とジャワ史についての小文)	Dr. Prijono／(初出はAsjoelah, 2604(1944)年 Nomor is-timewa)
93	1580 (2605)	Tjandi Panataran (パナタラン寺院)	Kobijutsu Kenkyujo
94	1581 (2605)	Tjoetatan tina sadjarah Asia Timoer Raja djeung sadjarah poelo Djawa (大東亜史とジャワ史についての小文) スンダ語	Dr. Prijono (Satjadibrataによるスンダ語訳)／[no.1578のスンダ語訳版]
95	1582 (2605)	Srigoenting (オーチュウ鳥)	Madjoindo, Aman Datuk 編／1950年に第2版
96	1584 (2605)	Tjoeplikan Babad Asia Wetan Agoeng serta Babad Tanah Djawi (大東亜史とジャワ史についての小文) ジャワ語	Raden Prijono／[no.1578のジャワ語版]
97	1585 (2605)	Kamoes leutik Soenda-Indonesia (スンダ語インドネシア語ポケット辞典)	Satjadibrata, Raden
98	1586 (2605)	Peirhal ikan-moedjair (淡水魚について)	Balai Poestaka
99	1588 (1945)	Bab miara moedjair (淡水魚の養殖について) スンダ語	Balai Poestaka

筆者作成

ジャワ語やスندا語の翻訳版もある。日本占領期のジャワでは、町から少し離れるとインドネシア語がほとんど通じなかったことを考えると、インドネシア語の本は限定的にならざるを得なかった。マレー語・ジャウィ辞典やカウィー・ジャワ語辞典、ジャワ語やスندا語の辞書などが刊行されていることは、日本占領期に公用語となったインドネシア語関連や日本語の辞書だけが刊行されていたわけではない事実を示している。また実用書は、どの時代でも求められるものであり、オランダの支配下に書かれたものでも日本占領期に書かれたものでも、役に立つものは重版された。それはまた、インドネシア独立後にも必要に応じて刊行された可能性が高いことを意味している。

第2に、小説などの文学作品はインドネシア語で書かれた図書が多い。文学作品については、日本占領も末期に近づく、ジャワ語やスندا語の短編小説を掲載するコーナーが『パンジ・プスタカ』に設けられた。しかし、基本はインドネシア語で書くことを日本軍政によって求められた。それはまた、オランダ植民地時代末期には、同分野においてマレー語（インドネシア語）の文学作品が優勢となってきた状況に逆行するものではなかった。また、作者の人生観や世界観といった主観が実用書などより色濃く内容に反映される。日本占領期は短期間であったため、長編小説は2点のみで、両書ともバライ・プスタカから刊行された。一方、短編小説や戯曲は『パンジ・プスタカ』のみでなく、啓民文化指導所が刊行した『クブダヤアン・ティムール』や、ジャワ新聞社の『ジャワ・バル』に多数掲載された。検閲等の統制によって宣伝の要素があったことは否めないが、それらの作品から日本占領下における作家の思考の軌跡を追跡することは意義がある。

第3に、より学術的な知識が必要な教養書については、それまでは主にオランダ語で書かれていた教養書がインドネシア語で書かれるようになって刊行された。その代表的なものが、インドネシア人がインドネシア語で初めて執筆したインドネシアの歴史書、サヌシ・パネの『インドネシア史 (Sejarah Indonesia)』である。それまでオランダ等の西洋の「知」によってほぼ独占されてきた近代的歴史学に基づいたインドネシア古代史とオランダ領東インドの歴史を、インドネシア人であるサヌシ・パネが日本占領期にどのように主体を転換させてインドネシアの歴史を描いたか、検討する意義がある。同書はインドネシア独立後も約20年におよんで再版・刊行され、多くのインドネシア人に読まれた。さらに、プリヨノ (Dr. Raden Prijono) の『大東亜史とジャワ史についての小文 (Sedikit tentang Asia Timur Raya dan Sedjarah Tanah Jawa)』は、インドネシア語、ジャワ語、スندا語で書かれているが、ムスリムの「キヤイ講習会」での講話を1冊の本にまとめたものである。題目から日本の「大東亜共栄圏」の宣伝を旨とした内容を連想させるが、必ずしもそうでない。歴史叙述は執筆者が置かれた時代における立ち位置の影響を避けることはできない。日本占領期における文学作品と歴史叙述がインドネシア人によってどのように行われたのか、分析することは大変興味深いテーマであると考えられる。

第4に、オランダ植民地時代に翻訳・刊行された多くの外国文学作品がみられない。西洋のものはNo.1454のイプセンの『人形の家』だけである⁹⁰。オランダ植民地時代にはシェークスピア、ディケンズ、マークトウェインなどもバライ・プスタカから翻訳本が刊行されていたが、みあたらない。タゴールの作品は継続して翻訳され、新聞等に掲載された。

第5に、日本人が著者の図書については、決して点数が多くない。文教局が著者となっている学校

⁹⁰ 日本占領期にウスマル・イスマイルやロシハン・アンワルが中心となって結成した劇団マヤによって上演された戯曲。翻案の脚本はアルメイン・パネが担当。日本でも、1911年に松井須磨子がノラを演じ、新しい時代の女性像を示した。

用の教科書3点を除き⁹¹、地方語等に翻訳されているものはインドネシア語の原本だけを1点として数えると、10点程度にしかならない。しかも、『ジャワにおける棉花栽培』、『公衆衛生の管理』、『怠ってはならない本分』、『石鹼の作り方』、と実用書が4点を占める。戦前の日本的価値観を示すものとしては、桜井忠温の『肉弾』、H. B. ヤシン等がインドネシア語に翻訳した『忠臣蔵』の脚本、および1944年に刊行された英米の帝国主義の歴史を批判した『英米の悪と罪の歴史⁹²』が目につく程度である。1942年11月20日の日刊紙『ペンバンゲン』に掲載されたバライ・プスタカの記事には、宮森朝太郎編の『日本の戯曲 (Tonil Nippon)』も翻訳中であることが記されている⁹³。宮森朝太郎は1930年代に日本の和歌、俳句、近松門左衛門の浄瑠璃の戯曲等を英語に翻訳してイギリスや東京の出版社から刊行した⁹⁴。おそらく、『日本の戯曲』は近松門左衛門の戯曲の英訳をインドネシア語に翻訳中であつたと考えられる。同書は『インドネシア国立図書館目録』には掲載されていないが、日本に関連した図書は英訳本からインドネシア語訳を行い早期に刊行する作業が進められたことの例と言えよう。

C. 流通と読み手

バライ・プスタカは、1921年から自社印刷工場を所有していたため学校用教科書の印刷を文教局より請け負っていた。したがって、日本軍の占領による混乱の中においても、紙やインクなどの資材が比較的確保しやすく、出版活動は続けられた。

バライ・プスタカの定期刊行物である総合誌『パンジ・プスタカ』は、定期購読者を募り、購読料前払い制を採用して、購読者に送付した。ジャワでは、オランダ時代のジャワでは定期購読者が1,567名であったのに対し、日本占領期にはその4倍の7,500名に増加した⁹⁵。この背景には、『パンジ・プスタカ』は1930年代にはすでに、ジャワ語の『クジャウエン』とスندا語の『パラヒアガン』の売り上げ部数を抜いたのに加えて⁹⁶、後者2点が日本軍によって発禁処分となったことが大きかった。オランダ植民地時代には東インド全体で7,000部が流通していたが⁹⁷、日本占領期にはジャワだけでそれ以上の定期購読者を獲得したことになる。それ以外にも、取次代理店や貸本屋を通して入取できた。バライ・プスタカの刊行物の広告が新聞・雑誌等に掲載され、それをみて注文・購入することもできた。また、スマトラでも販売されていたことが、スマトラで刊行された雑誌の広告から確認できた。

さらに、バライ・プスタカの最大の強みは、オランダ植民地時代に東インドの高等科のある国民学

⁹¹ 前述したように、バライ・プスタカは設立当初より、教育宗教省管轄の学校用図書は作成しなかった。ただし、自前の印刷所を保有していたため、それらの教科書の印刷を請け負うことはあった。日本占領期もその形を引きついでが、その中でバライ・プスタカが発行元となった学校用教科書が混入する場合もあったと推測する。さらに、軍政監部の法務部や青年団から委託された刊行物の発行元がバライ・プスタカとなっている場合がある。バライ・プスタカの図書には、それが教科書であろうと教養書や実用書であろうと、バライ・プスタカの番号が記されているが、発行元がバライ・プスタカでも軍政監部関連組織から委託を受けている刊行物にはその通し番号が与えられていない。

⁹² 『英米の罪と悪の歴史 (Sedjarah dosa dan kedjahatan Inggeris dan Amerika)』を執筆した Kaneko Masao は、『パンジ・プスタカ』の発行責任者でもあったが、身元は不明。(Pandji Posoetaka, 15 Mei, 2604 [皇紀] (1944), No. 10, p. 322.) 戦前バンドンで新聞刊行に関与し、市来竜夫と交友関係にあった人物かもしれない。

⁹³ Pembangun, 20 November 2602 [皇紀] (1942).

⁹⁴ 宮森朝太郎は、1869年に瀬戸内海の厳島で生まれ、慶應義塾大学で英語と英文学の教鞭をとった。1914-15年にかけてアメリカ、イギリス、スイスを訪問し、教育と演劇について学んだ。彼が編纂した日本文学等の英訳版からインドネシア語へ翻訳したと考えられる日本の俳句等が、1935年の『ブジャンガ・バル』や1942年の『アジア・ラヤ』で確認できる。(Miyamori, Asataro translated and annotated. *An Anthology of Japanese Poems*, Tokyo: Maruzen Company Ltd., 1938.)

⁹⁵ Pembangun, 20 November 2602 [皇紀] (1942).

⁹⁶ Teeuw, A. 1972. *Op.Cit.*, p. 115.

⁹⁷ Jedamski, Doris. 1992. *Op.Cit.*, p. 35.

校に併設されていた国民読書室でバライ・プスタカの本が閲覧できたことにある。読書室は、1930年代末には3,000室に達していた。しかしその設置場所は、ジャワとスマトラに限定されていた⁹⁸。日本占領期のジャワでは、それを国民図書館と改名し、「原住民」の民度を高めることを目的として、従来の高等科のある国民学校だけでなく、3年制の初等国民学校にも新たに併設した⁹⁹。しかし、戦時中であったため、十分な管理が行われたとは言えない。当時小学生であった作家アイップ・ロシディ（Ajip Rosidi）等は、学校の図書館では新刊本はほとんど入ることはなかったと回想している¹⁰⁰。すなわち、1930年代の倫理政策の後退によるバライ・プスタカの活動の停滞よりも、日本占領期および独立闘争期という戦時下の出版活動の停滞の方を、読者は肌で感じた。

また、オランダ植民地時代には、読書室のほかに巡回図書館が地方を回った。これをまねて、宣伝部が回覧文庫を運営した。宣伝班のバンドン地方工作隊が同地方を巡回しながらプルオクルトの初等中学校を訪問したことが報道されている。娯楽の乏しい農村の心の糧として、共栄圏の立ちあがる姿や、ジャワの留学生の東京における生活などを子供たちがむさぼるように読みふけている様子を、『ジャワ新聞』は宣伝臭を漂わせた写真入りで報告している。

しかし、バライ・プスタカ刊行の図書が、オランダ植民地時代と比較して、日本占領期に爆発的に増えたわけではないことと同様に、読者が爆発的に増えたとは考えにくい。日本占領期とそれに続く独立闘争期は、むしろ新刊本が読める環境ではなかった。

バライ・プスタカで働いていたインドネシア人作家たちは、東洋学を修めたオランダ人たちに代わった日本軍政の管轄下に入っても、多くはそのまま残留した。バライ・プスタカの再開を可能にしてくれたのは、戦前にジャーナリストとしてジャワに滞在した経験があり、インドネシアの民族主義運動に関心を寄せていた宣伝班の市来竜夫であった。換言すると「トアン・ジャパン」であった。彼の支援の下、アジアの中のインドネシアのアイデンティティ探索を行うこととなる。彼ら知識人は西洋教育を受けて育ってきたので、その探索の中で西洋文明の問題点を認識しつつも、切り捨てることはできなかった。市来に代わって「トアン・ニッポン」が管理者となったが、彼らはオランダ人よりも扱いやすかったはずである。

短期間で刊行できた図書は、オランダ植民地時代の図書の重版や、日本に関する英語で書かれた本のインドネシア語訳の出版であった。しかし、それらの図書の流通や読者層が拡大したわけではない。また、インドネシア人のアイデンティティ探索の一環としてインドネシア人作家による執筆活動も行われた。その活動内容については、それらの著作内容を分析することが重要である。

4. 新聞社

1930年代のオランダ領東インドではバタヴィアだけでも、オランダ語、華人系マレー語、マレー

⁹⁸ 山本信人。2002。「インドネシアのナショナリズム—ムラユ語・出版市場・政治」（池端雪浦編『植民地抵抗運動とナショナリズムの展開—19世紀末～1930年代』岩波講座 東南アジア史 第8巻, p. 172.）

⁹⁹ 『ジャワ新聞』1943年8月3日。学校の図書館には、バライ・プスタカ刊行のジャワ語一般図書325冊、同児童図書93冊、マレー語図書255冊、スンダ語図書294冊、計987冊が無料で配布された。

¹⁰⁰ Rosidi, Ajip. 2004. "Buku dalam Hidup Saya," in St. Sularto, Wandu S. Brata, Pax Benedanto ed. *Bukuku Kakiku Gramedia Pustaka Utama*, pp. 3-4.

語、華語、ジャワ語などの言語による約 180 紙の新聞が存在していた¹⁰¹。資金難や厳しい検閲のために数か月という短命のものもあった。新聞社は、オランダ植民地時代にも検閲などによる統制を受けていたが、植民地政府からは独立した民間の組織として存在していた。

また、日本語の新聞では『爪哇日報』と『日蘭商業新聞』が 1937 年に統合され『東印度日報』となっていたが、1941 年 6 月に第 2 次日蘭会商が決裂後に発禁処分となった。

(1) 書き手

日本軍がジャワに侵攻し軍政を敷くと、宣伝班が日本人の将兵および軍属を対象とした日本語新聞の刊行を続ける一方、1942 年 4 月 29 日にジャワの住民であるインドネシアの人々に対するインドネシア語日刊紙『アジア・ラヤ (Asia Raya, 大アジア)』を創刊した。

5 月 25 日に布告第 16 号を公布し、既存敵性言論機関の運営を禁止し、オランダ資本の新聞社が全く活動できなくなり、オランダ語新聞の発行が徐々に停止した¹⁰²。その後、それらの発禁処分となったオランダの中心的新聞社の印刷機を接収して、地方都市でも宣伝班によって次々と新聞が刊行された。さらに、1942 年 9 月 16 日に日本内地の陸軍報道部が「南方占領地域ニ於ケル通信社及ビ新聞工作処理要領」を決定し、ジャワの陸軍第 16 軍でも同月「中央新聞統制案」を決定し、その決定に基づいて朝日新聞社が委託を受けてジャワでジャワ新聞社を設立した。ジャワ新聞社は当初、主に日本人向けの日本語新聞『ジャワ新聞』(当初は『うなばら』)とそれ以外の日本語出版物の刊行を行った。後者の代表的な刊行物としては、日本語とインドネシア語の併記によるグラフ誌『ジャワ・バル (Jawa Baru, 新ジャワ)』があげられる。宣伝班は、戦時下の用紙不足を理由に主要都市において徐々に宣伝班が発行する新聞 1 紙へと統廃合し、現地紙への統制を強化していった。インドネシア原住民向け新聞に関しては、宣伝班が宣伝部となり、引き続き刊行した。

華人系新聞については、前述の「中央新聞統制案」で、華語新聞の存続を認め、華人系マレー語新聞についてはインドネシア語による原住民紙への吸収を図る方針が決定された。原住民紙と同様に統廃合された華語新聞は『共栄報』1 紙となった。当初廃刊の方針であった華人系マレー語新聞は結局統廃合されて『共栄報』のインドネシア語版『クン・ユン・パオ (Kung Yung Pao, 共栄報)』として存続した¹⁰³。その責任者であるウィ・チャン・チュイ (黄長水) は、海軍所属の吉住留五郎が戦前オ

¹⁰¹ Smith, Edward C. 1983. *Sejarah Pemgreidelan Pers di Indonesia*, Jakarta: Grafiti Pers, pp. 68–69.

¹⁰² Kan Po, No. 16. 同布告の説明 (“Pendjelasan Oendang-oendang No. 16” *Kan Po*, Boelan 3 2603, Nomor Istimewa, p. 25.) では、当初華語新聞は発禁の対象となっていた。しかしその後、漢字系華語新聞「共栄報」として存続させ、朝日新聞社からジャワ新聞社に赴任していた辻衛が指導員となった。華人系マレー語新聞は統廃合して原住民新聞に吸収される方針であったが、結局存続させた。その責任者に日本人を置く計画を立てたが実現できず、指導員として辻衛が指導に当たった。

¹⁰³ ジャワ以外の地域では、次のような新聞が創刊された。スマトラでは同盟通信社管轄の下、メダンでジャマルディン・アディネゴロ (前出) が『キタ・スマトラ・シンブン (Kita Sumatra Shinbun)』、コタラジャでアブドゥル・ワヒド (Abdul Wahid) が『アチェ・シンブン (Atjeh Shinbun)』、パダンでマジッド・ウスマン (Madjid Usman) が『パダン・ニッポウ (Padang Nippo)』、そしてパレンバンでヌグティク (Nungtijk) が『パレンバン新聞 (Palembang Shinbun)』を刊行した。南ボルネオでは、朝日新聞社管轄の下にパンジャルマシンでは A. A. ハミダン (A. A. Hamidhan) によって『ボルネオ・シンブン (Borneo Shinbun)』、ボンティアナクで R. P. パース (R. P. Paath) によって『ボルネオ・バラット・シンブン (Borneo Barat Shinbun)』が刊行された。マカサール地区では毎日新聞社管轄の下マカイ・ソフィアン (Manai Sophian) が『プワルタ・セレベス (Pewarta Serebesu)』、マナドで O. H. パンタウ (O. H. Pantauw) が『マナド・シンブン (Manado Shinbun)』を刊行した。読売新聞社管轄下、セラム地区のアンボンでパティマイバウ (Pattimaipau) が『シナル・マタハリ (Sinar Matahari)』を、バリのデンパサールでチョコルデ・ングラ (Tjokorde Ngurah) が『バリ・シンブン (Bali Shinbun)』を刊行した。

ランダ領東インドの華僑工作を行っていた際に知り合い、協力関係にあった人物である¹⁰⁴。

その後、ジャワの新聞関係者の相互扶助の機関として 1942 年 12 月 8 日に発足したジャワ新聞会を、原住民向け新聞の統制強化を目的として 1 年後の 12 月 15 日に治政令第 51 号をもって改組し、軍政会計より資金を拠出して、それらの新聞に日本人の指導員を付けてジャワ新聞会が経営を行うこととなった。また、1943 年 4 月に司令部直属の軍検閲班を設置して、宣伝部報道課から検閲の権限を移管して言論統制を強化した。これらの言論統制の強化は、それまでの宣伝部による言論統制が意図したように機能していない、と軍司令部が判断していたことを示すものでもある。では、どのようなインドネシア人が日本軍政下の新聞刊行にかかわったのであろうか。次の表 3 は、日本占領期の

表 3 日本占領下ジャワの主な新聞・幹部とその前身

	オランダ植民地時代 経営者・編集長	日本占領期 代表者・編集長等／ 日本人指導員	独立宣言後	発行地
1	Berita Umum (バリンドラ機関誌)	Asia Raya	Merdeka B. M. Diah (元 Asia Raya 記者)	ジャカルタ
	Sukardjo Wironopranoto	Sukardjo Wironopranoto Winarno Hendronoto／ (中谷義男, 谷口五郎)	Pedoman Rosihan Anwar (元 Asia Raya 記者)	
2	新報 (華語)	新新報→共栄報 (華語) 陳伯盈／辻衛	新報 (華語版, インドネシア語版)	ジャカルタ
	共報 (Hong Po, 華人系マレー語)	Kung Yung Pao (共栄報, 華人系マレー語)		
	黄長水 (Oie Tiang Tjoei)	黄長水 (Oie Tiang Tjoei) ／辻衛		
3	数社を統合	Cahaya	Suara Merdeka (元 Cahaya 記者数人)	バンドン
		Otto Iskandar Dinata/ 高柳章		
4	数社を統合	Sinar Baru	Suara Merdeka →Warta Indonesia H. Hetami (元 Sinar Baru 記者)	スマラン
		Abdulgafar Ismail, Buntaran Martoatmodjo →Parada Harahap/ 稲葉源一		
5	Suara Umum	Suara Asia	Suara Rakyat	スラバヤ
	Abdul Wahab (バリンドラ)	R. Abdul Wahab, R. Tokol Surhadjinoto/ 熊本良忠		
6	Soedoyo Tama (ジャワ語)	Sinar Matahari	Kedaulatan Rakyat	ジョクジャカルタ
	Bramono	Rudjito, Gondhojuwono, Bramono/ 宮川良彦	Bramono HM Samawi	
	Mataram (インドネシア語)			
	Gondhojuwono			

『ジャワ年鑑』(1944)等を基に筆者作成

¹⁰⁴ 市来竜夫・吉住留五郎対談会。1945。前掲誌, pp. 8-9。

ジャワ各地で刊行された新聞と主な編集長等の幹部，そして日本人の指導員である。また，インドネシアが独立後，同新聞の記者たちの一部によって創刊された新聞である。

この表3によると，オランダ植民地時代にすでに当時としては規模の大きな新聞の編集等を経験した1900年前後に生まれた人々が，日本占領期時代の新聞経営・編集にかかわっていたことが理解できる。その後，その中の主だった人々が，1943年10月に設立された中央参議院，1945年5月28日に設置されたインドネシア独立準備調査会等のメンバーに選出され，日本軍政の重要な役割を担う立場となった。そして，インドネシア独立後，彼らの多くは国政にかかわるようになった。一方，彼らの下で記者の経験を積んだ1910年代以降に生まれた若者たちの多くは，独立後に新たに新聞の創刊にかかわっていった。

日本占領期にインドネシア語日刊紙としてジャワで最大の発行部数を挙げていた『アジア・ラヤ』は，ジャワを占領した陸軍第16軍の宣伝班が既存のパリンドラ党の機関誌『ブリタ・ウムム (*Berita Umum*, 広報)』を吸収する形で創刊された。『ブリタ・ウムム』は当時勢力のあった政党の一つパリンドラ (*Partai Indonesia Raya*) の機関誌で，パリンドラの有力者スカルジョ・ウィロノプラノト (*Sukarjo Wironopranoto*) が編集長を務めていた。パリンドラは，オランダ植民地政府との協調路線の中で，インドネシアの自治，ひいては独立を勝ち取る方策を模索していた。その穏健路線は日本への接し方にも現れた。アジアの中でいち早く西洋近代化を進めた日本への関心は強く，スカルジョはインドネシアの独立，近代化の道を模索するため日本に1年間にわたり滞在した。パリンドラと近い関係があったものとしては，『スアラ・アジア (*Suara Asia*, アジアの声)』のアブドゥル・ワハブ (*Abdul Wahab*) も挙げられる。また，日本へ旅行を経験したものとしては，『チャハヤ (*Tjahaya*, 輝き)』のブラモノ (*Bramono*) や『シナル・バル (*Sinar Baru*, 新しい光)』のパラダ・ハラハップ (*Parada Harahap*) がいる。パラダ・ハラハップはオランダ植民地時代には日刊紙『ビンタン・ティムール (*Bintang Timur*, 東の星)』等を刊行し，反オランダ植民地主義に立った記事を掲載したことから10回以上に及ぶ筆禍事件で逮捕された経歴を持つ。彼らは，反植民地主義の論陣を張ってオランダ植民地政府当局の厳しい検閲で逮捕された経験を通して，巧みに検閲の目を欺いて自らの主張を記事に反映させる術を身につけていた。したがって，彼らを親日と理解するよりも，インドネシア独立を達成するために日本軍政との協調路線のうえで，独立を勝ち取るチャンスをうかがっていた人たちと捉えるべきであろう。

その一方で，オランダ植民地時代に反日の論陣を張っていた華人系マレー語新聞『シン・ポ (*Sing Po*, 新報)』のニオ・ユ・ラン (*Nio Yoe Lan*) や『クン・ポ (*Keng Po*, 競報)』のインジョ・ベン・ゴート (*Injo Beng Goat*) は抑留所に入れられた。また，原住民のなかでも地下に潜伏して抗日運動を展開したものや連合国側のラジオ放送を傍受した記者たちは逮捕され，その中には拷問を受けて死亡する者もいた¹⁰⁵。

30,000部を発行したジャワの中心的新聞『アジア・ラヤ』に関しては，創刊にかかわった宣伝班に所属していた富沢有為男等の回想録等を手掛かりに，さらに詳しくみてみよう。『アジア・ラヤ』の創刊にあたっては，戦前ジャワでジャーナリストとして働き，インドネシア民族主義運動に強い共

¹⁰⁵ Hill, David. 2010. *Journalism and Politics in Indonesia: A Critical Biography of Mochtar Lubis (1922–2004) as Editor and Author*, London; New York: Routledge, p. 25.

感を覚えていた陸軍第 16 軍嘱託として宣伝班に勤務していた市来竜夫が富沢有為男に、既知のインドネシア人を引き合わせた経緯があった。富沢有為男は芥川賞の受賞歴のある作家で、アジア太平洋戦争勃発直前の 1942 年 11 月に陸軍に徴用され、ジャワに向かう航路で、宣伝班班長の町田敬二とその他の宣伝班の主だった徴用作家たちとの話し合いで、新聞課長という役割を担うこととなった。富沢は、日本の新聞社で挿絵画家として短期間働き、また作家として文筆業に携わっていた。それ以前にフランスに渡航の途上、フランス植民地であったヴェトナムに寄港し、植民地の圧政に苦しむヴェトナム人を目のあたりにした経験がある。しかし、ジャワについてはほとんど知識がなかったし、ジャワへの着任前には国粹主義的作家と日本では捉えられていた。市来竜夫に紹介されたスカルジョ・ウィロノブラノト、そしてインドネシア人作家サヌシ・パネ等と、やはり徴用作家であった浅野晃も加わって、富沢有為男が住まいとした家で連日にわたって話し合い、両者は意気投合して新聞の創刊にあたった。その話し合いの通訳を務めた中谷義男は、市来と同様戦前にジャワに滞在し雑貨店で働いていた。キ・ハジャル・デワントロ (Ki Hadjar Dewantara) が創設した民族主義学校タマン・シスワ (Taman Siswa, 学童の園) で学び、インドネシアの民族主義運動に理解を示していた。新聞の主幹はスカルジョ、文化欄の編集長はサヌシ・パネとインドネシア人を全面に出した。富沢や浅野は、論説委員として名前が掲載された。サヌシ・パネは、前述したように、やはり市来竜夫の尽力で再開したバライ・プスタカのマレー語図書の編集長を 1941 年から担当していた。また『アジア・ラヤ』には、ウィナルノ・ヘンドロノト (Winarno Hendronoto) 等の『ブリタ・ウムム』の記者たちがそのまま移った。中谷義男は、日本人論説委員とインドネシア人記者との間の通訳を担当した。

『アジア・ラヤ』の事例からは、戦前からのジャワの新聞記者たちの動向を熟知していた市来竜夫という個人的意思が強く働いていたことが分かる。しかも彼は、日本の提唱した「大東亜共栄圏」構想には懐疑的で、インドネシアの民族主義運動に強い共感を懐いていた。日本人側の富沢有為男や浅野晃は、1942 年 9 月には日本に帰還している。宣伝班が引き続き『アジア・ラヤ』を管轄し、1943 年 12 月のジャワ新聞会の改組によって同新聞会の管轄下に入った。ただし創刊から一貫して日本人とインドネシア人の間を取り持っていた中谷義男は、ジャワ新聞社社員として、引き続き『アジア・ラヤ』にかかわった。日本側の管轄機関が変更されたのに対し、インドネシア人側はスカルジョ・ウィロノブラノトが最後まで主幹を務め、日本の敗戦後も 1945 年 9 月 27 日まで、すなわち連合軍が上陸し、インドネシア側が応戦する事態となるまで刊行された。

スカルジョ・ウィロノブラノトは、戦後国連大使を務めるなどして国際的に活躍した。『アジア・ラヤ』の若手記者であったロシハン・アンワール (Rosihan Anwar) は、スカルジョ・ウィロノブラノトにインドネシア人記者に空席があると誘われて、高等学校 (A.M.S.) 卒業後の 1943 年に『アジア・ラヤ』に入社し、廃刊まで籍を置いた。インドネシア独立後、同じ『アジア・ラヤ』の記者であった B. M. ディア (B. M. Diah) が創刊した『ムルデカ (Merdeka, 独立)』に加わり、1948 年にインドネシア語日刊紙『ブドマン (Pedoman)』を創刊した。その後、アメリカ留学を経てインドネシアジャーナリズム界の代表者の一人へと成長した。

既存研究の多くは、日本占領期に刊行された新聞が、日本のプロパガンダのための宣伝媒体であった側面が強調され、日本軍政がインドネシア人へ伝えたい情報が掲載された、とする。しかし、『アジア・ラヤ』創刊の経緯をみると、日本人側には様々な経歴を持った人々がかかわり、オランダ植民

地政府との交渉経験の豊富なインドネシア人新聞人を相手に、どのようなやり取りがなされたのか、より深く紙面を分析する必要があると考える。すなわち、日本占領期に刊行された新聞を日本人とインドネシア人の結節点としてとらえ、そこで展開された彼らの論考を分析することが、その後の両者の思考を理解するうえで役に立つと考える。筆者はその論点について、当時の「大東亜共栄圏」に関して『アジア・ラヤ』に掲載された論考を分析しているので、それを参照していただきたい¹⁰⁶。

ジャワでは、ジャワ新聞社が中核となって年鑑や辞書を出版した。占領初期には宣伝班が新聞を統括していたため、宣伝班員による書籍等も刊行された。宣伝班が当初刊行したインドネシア語日刊紙『アジア・ラヤ』等の新聞社やそこで働いた日本人徴用作家の浅野晃や阿部知二が著者となって刊行されたものが所収されている。また、華人系の新聞社も辞書等を刊行した。しかし、グラフ1でも示されているように、軍による言論統制が強化されていく過程で、日本占領期に新聞社から刊行されたものは、新聞も含めて点数は減少していった。

(2) 印刷・読み手

日本占領期に宣伝班の主導によって創刊された新聞は、発禁処分となったオランダ語新聞社が所有していた印刷所を接収して印刷された。ジャカルタの『アジア・ラヤ』は、『ジャワ・ボーデ』が所有していたユニー印刷、バンドンの『チャハヤ』は『プリアンゲル・ボーデ』、スマランの『シナル・バル』は『ロコモティーフ』、スラバヤの『スアラ・アジア』は『スラバヤ・ハンデルスプラット』の各印刷所を利用した。ジョクジャカルタの『シナル・マタハリ』は、軍政監部関連刊行物の章で触れたコルフ出版のジョクジャカルタ支部の印刷所を利用した¹⁰⁷。

新聞の用紙は、やはり軍政監部関連刊行物のところで触れたとおり、オランダ植民地時代の在庫を利用した。既存の新聞を統廃合し、宣伝班統括下の新聞に点数を限定した理由として、日本軍政は、戦時下の紙不足を挙げている。占領末期にはそれが最大の理由であったが、占領初期には、それ以上に新聞を監督する体制を整えるためであった、と考える。なぜならば、初期にはバライ・プスタカから日本占領統治に必ずしも役に立ったとは思われない教養書が刊行されている。また、前述したように1944年には王子製紙に委託して製紙工場を建設する計画も立てられていたからである。また、同年には地方語による17州2候地の各地域に20万部印刷して配布し、日本軍政の政策が農村末端まで伝達されるような『州報』を発行している。すなわち、既存の新聞を統制するために宣伝班がそれに代わる新聞をそれまで記者活動をしていた人々の活動の場を与える手段、すなわち知識人に対する日本の宣伝を当初の目的としていたが、結果として知識人に対する懐柔策の側面が強く、しかも現地の知識人はその機会を自分たちの都合の良いように利用しようとしたのではないのか。

それでは、誰が読者であったのか。『アジア・ラヤ』は、多くの関係者が合流したパリンドラ党の機関誌『ブリタ・ウムム』の定期購読者を引き継いだ¹⁰⁸。また、道端の露店で売られたり、子供が路上で売ったりする姿もみられた¹⁰⁹。また宣伝班の事務所が置かれたジャカルタでジャワ占領地の中央

¹⁰⁶ 姫本由美子、2015。「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念」立教大学アジア地域研究所『21世紀海域学の創成―「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ』研究報告書2, pp. 145-157.

¹⁰⁷ 谷口五郎、1991。「ジャーナリストとしてみたジャワ軍政」、前掲書, p. 276.

¹⁰⁸ *Asia Raya*, 29 April 1942.

¹⁰⁹ 宮下守「南方の宣伝に就いて（ジャワを主として）」1943年3月（非売品、大宅壮一文庫蔵）。

新聞と位置付けられた『アジア・ラヤ』は、ジャカルタ周辺地域だけでなく、ボゴール、バンドン、スマラン、ジョクジャカルタ、ソロ、マラン、スラバヤまで届けられた。それ以外の新聞は、発行地が属する州、候地内に限定されて販売された。また、刊行日は週4日、さらに3日に減らされていた。しかし、『アジア・ラヤ』だけでなく、販売地域が限定されていたその他の地方新聞も、国際情勢、およびジャワ以外のインドネシア地域の情報も、主な情報源を『アジア・ラヤ』紙や同盟通信社に依存する形で掲載した。最も早く創刊された『アジア・ラヤ』は、日本のジャワでの占領方針を知ろうと、発刊初日に予想以上に売れ、増刷を余儀なくされた。最盛期にはおよそ35,000部が売れた。次の表4は、ジャワで刊行されたインドネシア人向け雑誌・新聞等の刊行年順名称と発行部数である。ここに示された部数は、『パンジ・プスタカ』を除いてジャワ新聞会によって決められた。

軍政から委託を受けて設立されたジャワ新聞社がインドネシア人向けに発行したグラフ誌『ジャワ・バル』は、補助金を受けて書店や通信販売で廉価で売られたこともあり、35,000部が完売した¹¹⁰。スマトラでは、『ジャワ・バル』と同様のインドネシア語のグラフ誌『ミナミ (Minami, 南)』を同盟通信社が中心となって設立した昭南新聞会メダン支部が刊行したが、掲載された写真の量や質は『ジャワ・バル』には及ばなかった。『ジャワ・バル』はスマトラでも販売された。一方、スマト

表4 ジャワで刊行された主なインドネシア人向け雑誌・新聞の刊行年順名称と発行部数

	出版元	新聞・雑誌名	発行部数
1942年4月11日 (再刊)	バライ・プスタカ	『パンジ・プスタカ』(インドネシア語)	7,500部(ジャワ) ?(スマトラ)
1942年4月29日(創刊)	宣伝班→ジャワ新聞社	『アジア・ラヤ』(インドネシア語日刊紙) 地方紙:『チャハヤ』 『シナル・バル』 『スアラ・アジア』 『シナル・マタハリ』 『クン・ユン・バオ』	30,000部 7,000部 5,300部 18,400部 5,000部 5,000部
(蘭領時代)	ジャワ・ボーデ社 プマンダ(ン)ガン社	『ジャワ・ボーデ』(オランダ語) 『プマンダ(ン)ガン』(マレー語)	15,000部 7,000部
1943年1月 (創刊)	ジャワ新聞社	『ジャワ・バル』 (インドネシア語・日本語併記グラフ誌)	35,000部
1943年2月 (創刊)	ジャワ新聞社	『スルアン・キタ』 (インドネシア語壁新聞)	50,000部
1943年12月8日 (創刊)	軍政監部文教局編集/ ジャワ新聞社	『カナジャワ新聞』 (日本語、カタカナ文字)	75,000部
1944年9月8日 (創刊)	ジャワ新聞会	『●●州報』 ジャワ語、スندا語、マドゥラ語	17州2侯領地、各20万部

筆者作成

¹¹⁰ 『ジャワ・バル』など朝日新聞社関連機関が刊行した新聞やグラフ誌に用いられた写真は、朝日新聞社大阪本社で所蔵されている。その写真については次を参照。早瀬晋三・白石昌也編。2017.『朝日新聞大阪本社所蔵「富士倉庫資料」(写真) 東南アジア関係一覧』早稲田大学アジア太平洋研究センター。

ラで刊行された『ミナミ』については、ジャワで販売されたかどうかはわからない¹¹¹。仮名文字を用いた日本語の週刊新聞『カナジャワ新聞』は、文教局が編集し、一般向けに 30,000 部、学校教師生徒用に 45,000 部がジャワ新聞社から刊行され、後者は無料配布された¹¹²。当時ジャワ在住であったジャーナリスト谷口五郎は、ジャワ全体で約 5,000 万の人口に対して新聞の発行部数は『州報』を除いて約 300,000 部と発言しているが、表 4 に基づくと報道を目的とした新聞は 200,000 部に達することがやっとであったと思われる。日本では、当時約 7,000 万の人口に対して新聞発行部数は全体で 1,000 万部を超えていた。それと比較すると、ジャワでの識字率の低さは日本軍政の新聞政策に影響を与えた。また、バライ・プスタカの刊行物も含めて、刊行物は文字が読めるものが農村などで読み上げて、多くの人に伝える口承伝統が息づいていたとの証言が残されている。しかし、新聞に書かれた内容が文字の読める人によって読み上げられたとしても、それが後世の人々にまで語り継がれていったかどうかは疑問が残る。それよりは、前述したように、日本人とインドネシア人の結節点の場として新聞を捉え、そこで双方がどのようなかわりを持ち、その後の双方にどのような影響を与えたのか、新聞論稿に反映された彼らの思考の軌跡を明らかにすることの方に意義があろう。

5. 民間出版社とその他に読まれた刊行物

(1) 民間出版社

戦時・占領下にあったインドネシアで、資本、経営者、そして書き手が日本軍政から自由な形で出版活動を行う、すなわち民間による出版活動が困難であったことは、グラフ 1「インドネシアにおける出版元別刊行物の点数（1942-1945 年）」が示す通りである。しかし、日本軍が軍政を敷いてから言論統制の体制を整えるまでには一定の期間を要した。また、戦争によって混乱した社会においては、現地の人々の協力が得られる方策を取りつつ、軍政を円滑に遂行できるように言論統制を順次強化していくことも求められた。グラフ 1 でも、日本がインドネシアを占領した当初の 1942 年には 20 点以上の刊行物が民間の出版社から刊行されていたことが、1943 年以降には大幅に減少したことを示している。

オランダ植民地時代の民間出版社の資本は、コルフやキリスト教伝道協会系などのオランダ系が中心に握っていた。1930 年代に入ると、華人系の資本や原住民（プリブミ）の資本を基にした新聞社が登場してきた。オランダ植民地時代末期には、バライ・プスタカの官制の文学作品などの図書だけでなく、メダンを中心とした民間の出版社がいわゆるロマン・ピチサンや華人系マレー語で書かれた刊行物を多く出版していた。しかし、日本占領期のスマトラは陸軍第 25 軍の占領統治下にあり、次に明らかにするジャワの状況に照らし合わせると、スマトラでもロマン・ピチサン系の出版活動はほとんど行われなかった、と考えられる。『インドネシア国立図書館目録』には、メダンの民間出版社プスタカ・アンタラ（Pustaka Antara）から 1944 年に刊行された新渡戸稲造の『武士道（*Bushido*）』が掲載されている。また、同出版社は書店も兼ね、スマトラで刊行された『ミナミ』にスマトラやジャワで刊行された軍政監部系の出版物だけでなく民間の出版物の広告も掲載している。『インドネシア

¹¹¹ 1944 年 9 月に日本の小磯首相がインドネシアへの独立を将来与えると約束した声明を掲載した『ミナミ』の特別号がメダンの北スマトラ新聞から送られてきたことに対する謝辞が 1945 年刊行の『バンジ・プスタカ』で述べられている。ジャワとスマトラとの間での刊行物の往来がなかったわけではないことが示された。

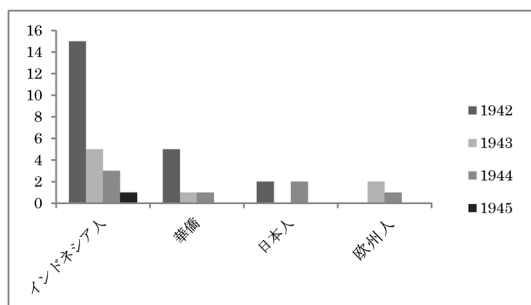
¹¹² 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題。1995。前掲書、p. 25。

『国立図書館目録』は、日本のジャワの軍政と関連があった機関の刊行物を中心に編纂されたものであり、民間の出版社、特にスマトラの活動については、今後の研究課題であろう。

さて、ジャワの日本軍政が1942年5月20日に公布した布告第16号によって敵性出版機関の活動は禁止された。そのため、当時の大手の出版社の中心的存在であったオランダ系の出版社は活動を停止し、印刷所は接収された。それ以外の民間の出版社は弱小のものが多く、しかも布告第16号に従って出版活動の継続の許可を得なければならず、また出版物の販売に先立ち、日本軍の検閲を受けなければならなくなった。

『インドネシア国立図書館目録』に掲載されている民間の出版社の刊行物は点数が少ないため、その実像を正確に反映している確証はないが、およそその傾向を示していると考ええる。その多くは、日本語やインドネシア語の辞書や教則本などの実用書が中心であった。前出のバライ・プスタカの『パンジ・プスタカ』の編集長となったアルメイン・パネは、インドネシア語の教則本をインドネシア語とオランダ語で執筆し、民間の出版社から刊行した。また出版地が、バンドン、ソロ、スラバヤなどのジャカルタ以外の都市が多い。

そして書き手は、グラフ4が示すように、インドネシア人だけでなく華僑・華人が多いことがわかる。華人は、漢字が読めたため、日本語の会話教本だけでなく、日本語の漢字についての教本、また中国語の教本も執筆し、出版した。民間の出版社は華人系のものが力を持っていた。日本人によるものは、マレー語の専門家であった宣伝部の上原訓蔵と元日本語教師長嶋弘（共著者 M. Sabirin）がバンドンのクサトリアン図書（Poestaka Ksatrian）から出版されたものがある。クサトリアン図書の母体は欧亜混血人の E. F. E. ダウウェス・デッケルがバンドンで1923年に創設したクサトリアン学院（Ksatrian Institute）である。



グラフ4 日本占領期に民間から出版された刊行物の書き手

ダウウェス・デッケル自身の著書『インドネシア概史：麗しの古代（*Ichisar Riwayat Indonesia: Keono dan Permai*）』も『インドネシア国立図書館目録』に掲載されているが、1944年刊行の改訂版である。長嶋の日本語とデッケルのインドネシア古代史に関する教科書は1930年代にクサトリアン学院での授業で用いるためにオランダ語で刊行されたものである。それが、日本占領後の1942年末にインドネシア語に翻訳されて出版された¹¹³。デッケルがそれ以前に執筆した世界史の教科書がオラ

¹¹³ 同書の刊行年を1942年とするものと1943年とするものがあるが、1942年が正しい。Van der Veur, Paul W. 2006. *The Lion and the Gadfly: Dutch Colonialism and the Spirit of E. F. E. Douwes Dekker*, KITLV Press. Reid, Anthony. 1979. "The Nationalist Quest for an Indonesian Past" in A. Reid and D. Marr edit. *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, Singapore: Published for the Asian Studies Association of Australia by Heineman Educational Books (Asia).

ンダの植民地主義の間接的な批判に当たるとして発禁処分となり、クサトリアン学院も1937年に閉鎖に追い込まれた。さらに日本のインドネシアでの文化工作に加担しているとの罪状を理由に、ダウウェス・デッケルは日本侵攻直前に南米のスリナムへ流罪となっていた。彼のインドネシア語訳のインドネシア古代史の本については、前述のパライ・プスタカから出版されたサヌシ・パネの『インドネシア史』について別稿で論じる際に、取り上げたい。

私立学校であるクサトリアン学院の両教科書は『インドネシア国立図書館目録』に掲載されているが、他の私立学校のものは確認できなかった。日本軍政は、前述の1942年4月20日公布の「学校再開ニ関スル件」に基づき、原住民の固有言語（マレー語、ジャワ語、スンダ語、マドゥラ語）を使用する私立学校については最寄りの軍政担当部隊長による認可を受ければ再開を認めた。それによって、ダウウェス・デッケルが中心となって1912年に設立したインド党（Indische Partij）の結成に加わったことのあるキ・ハジャル・デワントロによって1922年に創立された民族主義学校タマン・シスワが再開した。キ・ハジャル・デワントロは、1942年11月に日本軍政が民族主義者とイスラームの2大勢力を代表した4人による指導集団「四身一体（Empat Serangkai）」を打ち出した際に、スカルノ（Sukarno）、ハッタ（Hatta）、マンスール（Mansur）と一緒に代表となった。しかし、日本軍政は、1943年7月1日の治政令第23号の「私立学校令」で「私立初等国民学校、私立国民学校及び私立中等実業学校ニ非ザレバ之ヲ設立スルコトヲ得ズ」と公布し、私立学校の統制に乗り出した。1937年にはジャワに132校、スマトラに26校、カリマンタンに3校、セレベス、バリに各1校あったタマン・シスワは¹¹⁴、日本占領期に徐々に減少し、教育レベルの低さを問題視されて、1944年4月に一部を除き解散させられた¹¹⁵。

もう一つの勢力であるイスラーム系の学校については、日本軍政の管轄部署は当初宗務部であった。日本軍の占領により、イスラームの教育施設であるマドラサ（政府の近代学校に倣ったイスラームの宗教学校）と伝統的寄宿塾プサントレンも閉鎖されたが、オランダ植民地時代からの二元的な教育制度が温存されて早期に再開が許可された。しかし、日本軍政は当初、インドネシアのイスラームの実態をよく把握していなかったため、宮城暲将を強制して原住民の約9割を占めていたイスラーム信者の反感を買ったと同様に、イスラーム系学校で日本語以外の外国語を教えることを禁じたため、アラビア語を教えることができなくなり、宗教教師の大きな反発を招いた¹¹⁶。12月1日に軍政監部内務部に文教局が設置され、宗教行政に関する行事の処理はその教化課が担当することになり、宗教に関する担当部局が二分化された。しかし翌年10月1日に宗務部の改組拡充が行われ、文教局教化課が所管した宗教行事すべて宗務部に移管され、その監督課で行われることとなり、宗教団体及び宗教私塾等の監督指導にあたった。マドラサでは、国民学校と同様に日本語の授業が義務付けられ¹¹⁷、日本語学習書（イスラーム教師版）を特別に作成し、無料配布した¹¹⁸。また、学校の維持経費として補助金を交付したが、その実態はよくわかっていない。イスラーム教師版日本語教科書は『インドネシ

¹¹⁴ 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題。前掲書、p. 90.

¹¹⁵ 『ジャワ新聞』1944年3月24日。

¹¹⁶ 小林寧子。1997. 「インドネシア・ムスリムの日本軍政への対応—ジャワにおけるキャイ工作の展開と帰結—」『東南アジア史のなかの日本占領』早稲田大学出版部、p. 231.

¹¹⁷ 西野節男。1990. 『インドネシアのイスラム教育』勁草書房、pp. 76-77, p. 135.

¹¹⁸ ジャワ新聞社。1944. 前掲書、p. 146.

『国立図書館目録』には含まれていない。そのことは、日本軍政はイスラーム系の教育現場にまで強く介入することはなかったことを示しているのかもしれない。

ムスリムに対する社会教育としては、前述した「キアイ講習会」が挙げられる。日本軍政が個々のキヤイやウラマを重視したために、インドネシア・イスラーム同盟系の諸団体の連合体であったミアイ（MIAI, Madjilis Islam A'laa Indonesia）は解散し、1943年11月にイスラーム翼賛団体マシュミ（Majlis Syuro Muslimin Indonesia）が設立された¹¹⁹。マシュミは「キアイ講習会」を開催し、その受講生の中にはその後宗務部に配属されるものも多かった。バライ・プスタカの章で触れたプリヨノの『大東亜史とジャワ史についての小文』は、キヤイに対して行った講話をまとめたものであり、インドネシア語、ジャワ語、スندا語で刊行された。同書が印刷されたことによって、より多くのイスラーム指導者に読まれることを期待したのであろう。その「大東亜史」についての内容は、決して日本の大東亜共栄圏構想の一方的宣伝ではなく、1921年末から1922年初めに開催されたワシントン軍縮会議にまで言及している。また、日本敗戦後も非常に廉価にはあるがインドネシア社会で販売された。日本占領期のイスラームの研究者である小林寧子は、「日本軍政がインドネシアのイスラームについて十分な知識がなかったことから、イスラーム諸勢力も受け身であっただけでなく、自らの立場を有利に導こうとした」と分析している¹²⁰。プリヨノの書は、イスラーム勢力が日本の文化工作に受け身だけでなかったことを裏付けるものであろう。

また、プリヨノの『大東亜史とジャワ史についての小文』は、1944年にマシュミが月2回発行を始めたアラビア文字表記のインドネシア語を用いた『アシュラーッ（Assjoe'lah）』の特別号に掲載された。マシュミはその他に機関誌『インドネシアのムスリム（Soeara Moeslimin Indonesia）』を毎月刊行した。これらの刊行物も単に宣伝誌とみなすのではなく、内容を分析してみる必要があろう。

オランダ植民地時代に政府から相当額の補助を受けていたキリスト教伝道系の学校については、1942年3月14日に日本軍部が決定した「占領地軍政処理要綱」で、「原住民」の宗教にさしあたり干渉しない方針がとられたが、もう一方で欧式教育の是正も決められたことによる影響は大きかった。日本占領に伴い閉鎖されたミッション系学校は、再開を許可されはした。しかし、学校等に設けられた礼拝所の閉鎖、救世軍の解散、布教の禁止、社会事業の禁止、等によって資金難となり、学校数が減少していった。そして前述した1943年9月の軍政監部総務部長山本茂一郎の欧亜混血人に対する声明を受け入れなかった人々が、敵性国人として居住制限を受け、拘束されていった。ミッション系の学校も優秀なものを公立へと移行する方針がとられた¹²¹。ミッション系の学校の教科書は『インドネシア国立図書館目録』には含まれていない。

華人系学校は、1942年6月30日の治政秘第204号「華僑私立初等学校再開ノ件」で再開が許可された。華人系学校は、日本軍政の教育方針に従いながらも華僑総会が統括し、学校運営の方針を決定した。オランダ語の教育を受けていた華僑学校（HCS）の生徒は、同校が閉鎖されたため、華僑国民学校へ編入された。教科書は、中国国民政府の華僑学校用教科書が改訂され、日本軍の検閲後にジャカルタで印刷された。教授用語は華語であることには変化がなかったが、日本語の授業は義務教科と

¹¹⁹ 小林寧子。1997。前掲論文、p. 238-241。

¹²⁰ 同論文、p. 231。

¹²¹ ジャワ新聞社。1944。前掲書、p. 87。

なった。また、華人系マレー語の授業は禁止されたが、インドネシア語整備委員会が1942年10月に設立されると、それが契機となって、インドネシア語の授業も日本語と同規模で実施された。その他の地理や歴史の教科書は、反日部分が削除されたが、反オランダ的要素が付け加えられることはなかった¹²²。反日の意思表示をしなければ、華僑国民学校は存続が許された。

(2) その他の読まれた刊行物

インドネシアで流通した刊行物は現地で印刷・刊行されたものだけではない。日本の朝日新聞社は内閣情報部の委託を受けて日本語、中国語、マレー語、ビルマ語、タイ語、安南語、英語の7言語によるグラフ誌『太陽』を刊行した。これらの雑誌は、『インドネシア国立図書館目録』に所収されている¹²³。日本でインドネシアも含めて海外向けに作成された東方社刊グラフ誌『フロント (FRONT)』も7,000部が日本の大本営からジャワの軍政監部に送られ、各州庁を経てジャワ全島の学校、青年団、警防団、各官庁に配布された¹²⁴。この2点の雑誌は、戦局の悪化に伴い輸送路が寸断され、占領末期にはインドネシアには届かなくなった。

日本占領下に現地で刊行されたもの以外のものとしては、閲覧できた人物は大変限られたが、冒頭で述べたバタヴィア学芸協会へ献納された刊行物を含め、同協会傘下の博物館付属図書館が所有していた50万冊におよぶ蔵書がある。また、その他のオランダ植民地時代の芸術会館や個人の蔵書も多数存在していた。それらの蔵書は、1942年暮れ頃から徐々にオランダ人の多くが拘束されたため、没収されて日本が開設した南方文化研究室で整理されて保管された¹²⁵。その図書類は約4万冊に及んだ。日本軍政は、それらの図書類の閲覧を一般の人々に許可した¹²⁶。それは、スマトラのメダンでも同様であったことは前述した。すなわち、当時の学問の世界的水準の図書を日本占領下のインドネシアでインドネシア人も含めて読むことができた。博物館付属図書館を利用した知識人の中には、『アジア・ラヤ』の若手記者であったロシハン・アンワルや同盟通信社のジャカルタ支局に勤めていたプラムディヤ・アナンタ・トゥール (Pramdiya Ananta Toer, 1925-2006) がいた。プラムディヤは、同盟通信社での上司であった俣野博が敵性語である英語、オランダ語やフランス語で書かれた書籍も希望すれば購入許可を出してくれ、また、書記の学校にも通わせてくれた理解のある上司であった、と回顧している¹²⁷。

¹²² エディ・ヘルマワン (1995) 『インドネシア華人の歩み』 創栄出版, pp. 85-95.

¹²³ Sid. Peng. PP "Yang Kita Terima" *Panji Poestaka*, 2605 [皇紀] (1945), p. 147.

¹²⁴ 『ジャワ新聞』 1943年7月27日.

¹²⁵ 別枝篤彦「南方文化の研究にたずさわって」(インドネシア日本占領期史料フォーラム『証言集 日本軍政下のインドネシア』 龍溪書舎, 1991年, p. 367.

¹²⁶ 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題. 1991, 前掲書, p. 109.

¹²⁷ Anwar, Rosihan. 2004. "Dengan Buku Menjadi Otodidak Sepanjang Hayat," in St. Sularto, Wandu S. Brata, Pax Benedanto ed. *Bukuku Kakiku*, Gramedia Pustaka Utama, p.310; Asian Literature Seminar (http://www.asianmonth.com/prize/english/lecture/pdf/11_02.pdf) (2013年11月5日閲覧). また同盟の俣野だけでなく、日本人の知識人も西洋の図書の意義を認めていた。

ジャカルタにあったオランダ語や英語の図書の検閲を当初行ったのは、それらの言語に通じた宣伝班の徴用作家であった阿部知二であった。幾軒かの本屋、貸本屋、図書館、また個人の蔵書、役所の図書などの中から、日本に有用なものを探し、また敵性に関わるものを没収したりした。敵性にかかわるものとしては、日本への敵愾心を煽ろうとして戦前英米から入ってきた本が多かったが、それらはほとんど、その誹謗の悪質さにおいて憤怒させ、その日本認識の浅はかさにおいて失笑させられるものであった、と分析している(阿部知二. 1996. 『火の島：ジャワ・バリ島の記』 中央公論社, pp. 33-34)。しかし彼は、オランダ人を始め敵性人ではあったが、日本軍の拘引におびえながらも、孜孜として研究を続けた

一方、日本軍の上陸前に、オランダの本を所持していることが知られることを恐れて、自らのオランダ語の本を「焚書」処分したり、学校と図書館のオランダ語の本を事前に生徒に分けて持ち帰らせ、保存したりするなどの自己規制を行ったインドネシア人もいた¹²⁸。しかし処分されずに古本屋で売られることとなった本も多数あり、それらの本をタクディル・アリシャバナ等が買い集め、熱心に読んでいた様子を自身の小説『敗北と勝利 (Kalah dan Menang)』で描写している¹²⁹。

結語

以上、日本占領下インドネシアで読まれた刊行物について、『インドネシア国立図書館目録』を手掛かりに考察してきた。その結果、同目録に収録されている刊行物は、インドネシアが日本の占領下にあったため、日本の占領統治政策の影響を多かれ少なかれ受けて刊行されたものであることが分かった。

しかし、日本の占領軍のインドネシアでの統治政策は、占領前の社会の知的状況を見捨てることはできなかった。それはオランダの植民地統治によって形作られたものであるが、一方にオランダ語、英語等の西洋語で書かれた刊行物を読んで日々の知的営為を行ってきたオランダ人、欧亜混血人、華僑、そして歐式教育を受けることができた一握りのインドネシア人が存在した。それ加えて、地方語によって近代初等教育を受けることができた人々や、近代教育を実施したイスラーム宗教学校で教育を受けることのできた人々がいた。そしてその他の文字を読むことのできない人々がおおよそ9割を占めていた。日本占領軍がインドネシア社会を統治するにあたって、オランダ人にとって代わって日本が統治者となったが、近代教育、換言すれば建前上は教授用語としてオランダ語は禁止されたが、欧式教育を受けた人々の協力が必要であったため、オランダ植民地時代の「知」は断絶しなかった。

この構図が最も顕著に表れたのが、日本軍がオランダ植民地時代の研究機関を接収した時である。日本人が所長となっても、それらの研究所のオランダ人研究者の研究成果に依存し、研究成果も英語等で書かれたものが印刷された。また、オランダ植民地時代に収集された当時の最先端の「知」を所蔵している図書館も利用されることとなった。さらに、欧亜混血人に日本軍政への協力を呼びかけることとなった。この行為は、日本を中心とした「東西文化の摂取醇化」を目指るをえなかった日本政府の文教方針とも合致するものであった。

軍政監部が発行した『KAN PO』や学校用教科書も、インドネシア社会の言語状況を反映せざるを

学者の姿に打たれ、軍首脳部とかけあって学者の保護に乗り出した「英米自由派」の姿を見せた（木村一信。1992。「阿部知二 インドネシアへの旅—ヒューマニズムと逸楽と—」；芦屋信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験—近代日本文学の陰面』世界思想社）。その阿部にとって、欧米の様々な書籍を一様に敵性資料として没収してしまうことはなかった。また、宣伝班に所属した徴用作家大宅壮一は、1943年暮れに日本へ帰還するにあたって、中身がほとんど横文字の本であった大きな箱詰め荷物の7個を海軍に頼んで船で日本に送った（及川敬一。1996。「武田麟太郎—インドネシアの独立を夢見て」『南方徴用作家—戦争と文学』世界思想社、p. 151.）。

¹²⁸ 佐藤正範。1980。「インドネシアにおける日本軍政の言語政策（1）」『太平洋学会誌』No. 6 1980: 4, p. 113, p. 115.

¹²⁹ St. Takdir Alisjahbana. 1992. *Op. Cit.*, p. 97, p. 141, p. 155. 収容所に送られたオランダ人所蔵の大量の本が古本屋で非常に安価で売られることになった。ニーチェ、マルラクス (Malraux), メノ・テル・ブラーク (Menno ter Braak), ヤン・ロメイン (Jan Romein), E. ドゥ・ペロン (E. du Perron), スォーホフ (Slauerhoff) などの本が多くのインドネシア人作家によって読まれることとなった。日本占領期に精力的に詩作したハイリル・アンワル (Chairi Anwar) の人生観が反映された作品には、第一次世界大戦後に社会全体が崩壊し、伝統すべてが揺らいだオランダが生んだ彼ら文学者の影響を明らかに受けていると H.B. ヤシンは分析している。(Jassin, H.B. 1954. *Kesusasteraan Indonesia dimasa Djepang*. Tjetakan Kedua, Jakarta; Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K., p. 24.)

得ない部分もあった。日本軍政は、日本語が社会に浸透するまでインドネシア語を学校教育の教授用語として導入しようとしたが、地方語を存続させざるを得なかった。しかも、日本語の教科の授業時間を増やしていったため、インドネシア語の授業は優先順位が低くなった。また、日本占領は短期間であったし、学校に通える生徒が急増したわけでもなかったため、インドネシア語は「国民的出版語」となるまでには至らなかった。その結果、占領末期でも地方語による刊行物も多く刊行された。

一方、日本の侵攻前夜のオランダ領東インドでは、西洋近代教育を受けたインドネシア人知識人の間で民族主義運動が活発化していた。彼らは、その中でインドネシア人のアイデンティティを模索していた。そこでは、西洋を鏡としたアジア人としてのインドネシア人のアイデンティティの模索も行われた。その状況の中に、アジアの指導者を自認した日本が侵攻してきた。日本軍は、明確に抗日運動を展開したものを除いて、限られた存在であった知識人を登用した。彼らの中にはインドネシア人のアイデンティティの模索の一環としてインドネシア語で文学作品や歴史書を執筆した者もいた。日本占領軍の中には彼らの執筆を後押しした者もいた。こうしたインドネシア人と日本人の間に何らかの相互作用が存在したのか、それを明らかにすることが筆者の今後の研究課題である。

一次資料

新聞

- ・ *Asia Raya*
- ・ *Pembangun*

以上の他、次の目録所収の新聞 (Perpustakaan Nasional Indonesia. 1983. *Katalog Terbitan Selama Pendudukan Jepang di Indonesia*.)

- ・『ジャワ新聞』
- ・『スマトラ新聞』

雑誌・図書

- ・ *Kan Po*. 『官報』
- ・ *Pandji Poesoetaka*
- ・『ジャワ・バル』
- ・『新ジャワ』
- ・ Gunseikanbu. 2604 [皇紀] (1944). *Orang Indonesia Jang Terkemoeka di Djawa*.
- ・ Kaneko Maso. 2604 [皇紀] (1944). *Sedjarah dosa dan kedjahatan Ingeris dan Amerika*
- ・ Kantor Pengajaran. 2603 [皇紀] (1943). *Tjeritera Lama Tjetakan Kedoea*.
- ・ Lembaga Bahasa Indonesia. 2604 [皇紀] (1944). *Istilah Bahasa Indonesia*, Medan.
- ・ Mas'oe'd, Ki Agoes. 1942. *Sedjarah Palembang Moelai Sedari Seriwidjaja Sampai Kedatangan Balatentara Dai Nippon*, Djakarta: Barisan Propaganda Dai Nippon "Sinar Matahari" (実際の発刊地はパレンバン)

他、次の目録に収録された雑誌・図書 (Perpustakaan Nasional Indonesia. 1983. *Katalog Terbitan Selama Pendudukan Jepang di Indonesia*.)

- ・ Miyamori, Asataro translated and annotated. 1938. *An Anthology of Japanese Poems*, Tokyo: Maruzen Company Ltd.
- ・ 企画院・大東亜建設審議会編・石井均, 明石陽至解題. 1995. 『大東亜建設審議会関係史料—総会・部会・速記録—』復刻版第1巻, 龍溪書舎.
- ・ 爪哇軍政監部編・倉沢愛子編解題. 1994. 『ジャワ軍政規定集 [1]』, 龍溪書舎.
- ・ 爪哇軍政監部総務部調査室発行・倉沢愛子解題. 1991. 『極秘 爪哇に於ける文教の概況』復刻版, 龍溪書舎.
- ・ ジャワ新聞社. 1944. 『ジャワ年鑑 (昭和19年)』(復刻版, ビブリオ, 1973年).
- ・ 大日本軍政部編・爪哇軍政監部編・倉沢愛子編. 1993. 『日本語教科書』復刻版, 龍溪書舎.
- ・ 中谷義男「中谷義雄談話 軍政の思い出」1956年11月20日, 西嶋コレクション JV 34-2 (早稲田大学所蔵).

参考文献

- ・ 阿部知二. 1996. 『火の島：ジャワ・バリ島の記』中央公論社.

- ・アンダーソン、ベネディクト。1997.『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行（増補版）』白石 隆・白石さや訳、リプロポート、NTT 出版。
- ・乾千代。1998.「日本占領期ジャワの国民学校教育」『東南アジア—歴史と文化—』No. 27.
- ・エディ・ヘルマワン。1995『インドネシア華人の歩み』創栄出版。
- ・及川敬一。1996.「武田麟太郎—インドネシアの独立を夢見て」『南方徴用作家—戦争と文学—』世界思想社。
- ・カナヘレ、ジョージ S. 1977.『日本軍政とインドネシア独立』（後藤乾一、近藤正臣、白石愛子訳）
- ・木村一信。1992.「阿部知二 インドネシアへの旅—ヒューマニズムと逸楽と—」（芦屋信和・上田 博・木村一信編『作家のアジア体験—近代日本文学の陰面—』世界思想社。
- ・小林寧子。1997.「インドネシア・ムスリムの日本軍政への対応—ジャワにおけるキヤイ工作の展開と帰結—」『東南アジア史のなかの日本占領』早稲田大学出版部。
- ・倉沢愛子。1992.『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社。
- ・後藤乾一・山崎功。2001.『スカルノ—インドネシア「建国の父」と日本—』吉川弘文館。
- ・佐藤正範。1980.「インドネシアにおける日本軍政の言語政策（1）」『太平洋学会誌』No. 6.
- ・鈴木静夫・横山真佳編著。1984.『神聖国家日本とアジア—占領下の反日の原像—』勁草書房。
- ・田中館秀三。1944.『南方文化施設の接収』時代社。
- ・鶴見俊輔。1982.『戦時期日本の精神史—1931～1945 年—』岩波書店。
- ・戸田金一。1977.「インドネシアにおける地方語教育の尊重」『九州大学教育学部付属比較教育文化研究施設紀要』第 27 号、1977 年 2 月。
- ・富沢有為男。1943.『ジャワ文化戦』日本文林社。
- ・中村孝志。1942.「蘭領東印度の文化施設」『国際文化』18 号。
- ・西野節男。1990.『インドネシアのイスラム教育』勁草書房。
- ・秦郁彦。1998.『南方軍政の機構—幹部軍政監一覧—』南方軍政史研究フォーラム。
- ・早瀬晋三・白石昌也編。2017.『朝日新聞大阪本社所蔵「富士倉庫資料」（写真）東南アジア関係一覧』早稲田大学アジア太平洋研究センター。
- ・姫由美子。2011.「日本占領期のインドネシア文学：啓民文化指導所に集まった作家たちの作品」『アジア太平洋研究論集』20 号。
- ・姫由美子。2015.「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念」立教大学アジア地域研究所『21 世紀海域学の創成—「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ—』研究報告書 2.
- ・深見純生編。1993.『日本占領期インドネシア年表』インドネシア史研究会。
- ・別枝篤彦。1991.「南方文化の研究にたずさわって」（インドネシア日本占領期史料フォーラム『証言集 日本軍政下のインドネシア』龍溪書舎）
- ・宮下守「南方の宣伝に就いて（ジャワを主として）」1943 年 3 月（非売品、大宅壮一文庫蔵）。
- ・山本信人。1995.「メダンのロマン・ピチサン—1930 年代末インドネシア文化地図と大衆小説をめぐる政治—」『法学研究』11 号。
- ・山本信人。2002.「インドネシアのナショナリズム—ムラユ語・出版市場・政治」（池端雪浦編『植民地抵抗運動とナショナリズムの展開—19 世紀末～1930 年代—』岩波講座 東南アジア史 第 8 巻。）
- ・早稲田大学大隈記念社会科学研究所編。1959.『インドネシアにおける日本軍政研究』紀伊国屋書店。
- ・Aeusrivongse, Nidhi. 1976. *Fiction as History: A Study of Pre-War Indonesian Novels (1929-1942)*, Ph. D. dissertation, the University of Michigan.
- ・Alisjahbana, St. Takdir. 1992. *Kalah dan Menang*, Jakarta: Penerbit Dian Rakyat.
- ・Anwar, Rosihan. 2004. "Dengan Buku Menjadi Otodidak Sepanjang Hayat," in St. Sularto, Wandu S. Brata, Pax Benedanto ed. *Bukuku Kakiku*, Gramedia Pustaka Utama
- ・Baird, J. Kevin and Marzuki, Sangkot. 2015. *War Crimes in Japan-Occupied Indonesia: A Case of Murder by Medicine*, Potomas Books, An Imprints of the University of Nebraska Press.
- ・Chanafiah, M. Ali dan Chanafiah (Pane), Salmiah. 2010. *Perjalanan Jauh: Kisah Kehidupan Sepasang Pejuang*, Bandung: Uti-mus.
- ・Echols, John M. 1963. *Preliminary Checklist of Indonesian Imprints During the Japanese Period March 1942-August 1945 With Annotations*.
- ・Hill, David. 2010. *Journalism and Politics in Indonesia: A Critical Biography of Mochtar Lubis (1922-2004) as editor and Author*, London; New York: Routledge.
- ・Jassin, H. B. 1954. *Kesusasteraan Indonesia dimasa Djepang*, Tjetakan Kedua, Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K.; Jakarta.
- ・Jassin, H. B. 1967. *Kesusasteraan Indonesia Modern dalam Kritik dan Esei I*, Tjetakan Ke-empat, Djakarta; Penerbit P. T. Gunung Agung (初版は 1954 年)。

- Jedamski, Doris. 1992. "Balai Pustaka: A Colonial Wolf in Sheep's Clothing," *Archipel*, Volume 44.
- Moriyama, Mikihiro. 2005. *Sundanese Print Culture and Modernity in 19th Century West Java*, Singapore University Press.
- Pane, Sanoesi. 1946. *The Voice of Free Indonesia* No. 17, May 18.
- Quinn, George. 1992. *The Novel in Javanese: Aspects of Its Social and Literary Character*, Leiden: KITLV Press.
- Reid, Anthony. 1979. "The Nationalist Quest for an Indonesian Past" in A. Reid and D. Marr edit. *Perceptions of the Past in South-east Asia*, Singapore: Published for the Asian Studies Association of Australia by Heineman Educational Books (Asia).
- Rosidi, Ajip. 2004. "Buku dalam Hidup Saya," in St. Sularto, Wandu S. Brata, Pax Benedanto ed. *Bukuku Kakiku* Gramedia Pustaka Utama.
- Smith, Edward C. 1983. *Sejarah Pemgreidelan Pers di Indonesia*, Jakarta: Grafiti Pers.
- Soebagijo, I.N. 1977. *Sejarah pers Indonesia*, Jakarta; Dewan Press.
- Sutherland, Heather. 1968. "Pudjangga Baru: Aspects of Indonesian Intellectual Life in the 1930s," *Indonesia*, Ithaca: Cornell University, No. 6.
- Teeuw, A. 1972. "The Impact of Balai Pustaka on Modern Indonesian Literature" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 35-1.
- Van der Veur, Paul W. 2006. *The Lion and the Gadfly: Dutch Colonialism and the Spirit of E. F. E. Douwes Dekker*, KITLV Press.
- Yamamoto, Nobuto. 1995. "Colonial Surveillance and 'Public Opinion': The Rise and Decline of Balai Poestaka's Pree Monitoring," *Keio Journal of Politics* 8.

ウェブ・サイト

Asian Literature Seminar (http://www.asianmonth.com/prize/english/lecture/pdf/11_02.pdf) (2013年11月5日閲覧)